貴方は私を支配する

門倉 いさみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
貴方は私を支配する

【Ｎコード】
Ｎ１９７８Ｑ

【作者名】
門倉　いさみ

【あらすじ】
国王・グレンダートにアリアが正妃として嫁いだのは１６歳の時。唯一の庇護者である父・セイィータ公爵とアリアは共に、国王派にただ疎まれ続けていた。
そして子がないまま時は過ぎ、国王には寵愛する少女が現れ、全てが急変していく。
窓辺に立ち、そこから臨むほんの少しの一方的な時間だけが孤独なアリアの幸せだった。
ただ、それだけで良かったのだ。

※視点が変わります。視点によって時系列にばらつきがあります。
また、幸せな結末ではありません。同性愛表現があります。
※追記・完結後、矛盾点などの修正加筆予定です。

1　正妃・アリア

窓辺に立ち、じっとガラス越しの向こうを見た。

けれど、夜の帳が下りたそこはよく見えなくて物悲しくなる。

陽の下でなら、感嘆の溜め息を誘う薔薇が庭園中に咲き誇っているのに。

そう思う事は、未練だろうか。

「……私は、ここを眺めるのが好きだったわ」

背後に立つ気配へ、秘密を告白するかのような囁き声で告げた。

夜の色が支配している今、静けさを払拭するような楽しげな音楽と歓喜のざわめきが風に乗って届いて来る。

すぐ近くではないから、うっすらとした膜越しのように聞こえる大勢の気配は決して自分を歓迎はしない。

瞼を伏せる事もせず、ただガラスの向こうを見下ろし続ける。

そんな彼女に一歩、背後の気配が近付いた。

慰めようというのか。

けれど、言葉も温もりも伸びて来ず、一歩で止まった気配はだがそれこそが優しさなのだとすでに知っていた。

「ねぇ、私は決めたわ」

どれだけ微動だにせず、時間が過ぎたか。
未練を振り切るように振り返った。
室内には灯りひとつなく、薄闇の中では相手の姿を見れない。
だが、ここ数年で馴染んだ気配はあまりにも心地良いから、目の奥が痛い熱を持つ。
それでも涙は流れず、表情の乏しい目尻を少しだけ痙攣させた。
「ここから臨める薔薇園を、時折散歩するあの方を見ているのが好きだった」
「……」
「あの方が、決してこちらを振り向く事がなくても。私に気付かなくても。それでも一目あの方を見れるだけで幸せだった」
「……」
「……けれど、駄目ね。今はそれが辛い。私ではない人と隣り合って優しく笑うあの方を見るのが、幸せだけとは思えなくなってしまった」
それが罪のようにして視線が眇められる。
その視線の先で見ているのは、辛い光景なのだろう。
僅かに震えた声音に気付けるのは、今彼女と向かいあっている者だけ。
表情の乏しい彼女は、《人形姫》と呼ばれていた。
唯々諾々と、ただ周囲に言われるまま流されるまま生きているかのような、そうして作った笑顔を浮かべ、紡ぐ声音の淡々さが、彼女を《人形》と言わせていた。

だが、そうではないと。
気付いているのは、やはり今向かい合っている者だけ。
彼女はすっと右掌を下に向けて上げた。
差し出された華奢な手に、伸ばされた大きな掌がそれをそっと取り、やわりと握る。
「連れて行って。終わりの場所に」
「お前の望む通りに」
すくざま返った声音の強さに含まれた柔らかさに、彼女は淋しげに小さく笑った。

アリア＝ヴァイス＝クロス＝セイィータは、三代以上続くことで血統貴族と総称される百二十三家の貴族たちの頂点にある筆頭公爵家の娘だった。
家系図を紐解かずとも建国以来続いている由緒ある家柄で、王家とも密接に繋がっているのは周知の事実だ。
セイィータ家から王家に妃を何人も送り出し、また王女や王子が降り公爵家と婚姻した事も一度や二度ではない。

最も王家に近しく濃い血筋の公爵家は、だが現在最も王家…それも筆頭である国王に疎まれている。

それに至るには、現国王・グレンダート＝ヴァイス＝シャゼ＝ダリウゼンとアルフォンソ＝クラン＝セイィータ公爵との長きに渡る確執があった。

アルフォンソ＝クラン＝セイィータ公爵といえば、特に先代国王・ギルリアード二世に早くから信頼・寵愛された家臣だ。

また何を置いてもセイィータ公爵に真っ先に相談を持ち掛け、公爵の意見を重視する傾向が強かったギルリアード二世は体が弱く、公爵と同じ年であった為もあるのか、嫡子たる王子が僅か七歳の折、風邪を拗らせ呆気なく早世する間際に公爵を王子の後見人に指名した程だ。

それだけであるならまだしも、公爵の生まれたばかりである娘・アリアをいずれは王子の正妃にするよう遺言した。

その事が、常日頃から気に入らなかった有力貴族たちの反感を倍増し、かつ七歳という幼さで国王とならざるえなかったグレンダート王子に元からセイィータ公爵の悪い噂をある事ない事を吹き込んでいた口の滑りを更に良くしていった。

幾らセイィータ公爵の手の者が眼を光らせようと、髪の毛一筋の隙間を見つけてはグレンダートの心にセイィータ公爵への悪印象を植えつけていくのだ。

また、国王となったグレンダートが「こうであれ・ああであれ」と口うるさくする公爵を疎ましいと思うのも早かった。

それでも、国内外のセイィータ公爵が齎す権力・影響力は大きく、国王と言えど簡単に無視出来ないもので、だからこそアリアは十六歳の成人を迎えると同時に当時二十三歳となっていたグレンダートの正妃として嫁いだ。

それから五年。

アリアとグレンダートとの間に、子はなかった。

本来、国王の正妃が子を成せなかった場合、三年で有無を言わさず離縁されるのが慣わしだ。

十数代前、妾妃の生んだ王子と、それより半月遅れて生まれた正妃の王子との間で国内中を巻き込んだ玉座争いが起こり、更には正妃の第二子であるもう一人の王子が玉座争いに参戦した際の悲劇を教訓に、玉座を継ぐ者は正妃腹の子のみで、また第一子であれば男女問わず第一位王位後継者と定められた。

事実、その事で三度女王が即位している。

グレンダートの後宮には、三十人程の愛妾が存在するが、その愛妾たちにも子はなく、また子があったとしても王位継承権は巡って来ない。

継承権の条件のもう一つが、正妃の地位にある最中（さなか）で産み落とす事も絶対であるからだ。

その為、後に正妃になろうと正妃になる前に生んだ子に継承権はなく王族とも呼ばれない。

余程、突出した才能でもなければ一代限りの伯爵位と生涯生活に

困らない程度の金銭が支給されるだけだ。

三年で離縁されず、アリアが五年も正妃にあったのは、ひとえに先代国王の遺言と父であるセイィータ公爵の影響力があったからだ。

だが、その影響力は急激に衰えていた。

半年前、グレンダートが一人の少女を人目も憚らず寵愛し始め、後宮の美姫たちに手を出す事が一切なくなってしまったからである。

また、その少女を寵愛しているのは国王であるグレンダートだけではなかった。

文官・武官。

それぞれの上層部に属する者たちの、それもグレンダートに近しく、セイィータ公爵を敵視する有力者たちもが少女を溺愛しているのは周知の事実。

元から、正妃とは名ばかりのお飾り妃と言われ、王宮に出入りする侍女や下働きの者たちにすら軽視されていたアリアなど誰も見向きもしない。

まして、アリアの唯一の庇護者であるセイィータ公爵は僅か五日前に急死した。

表向きは、日頃から弱っていた心の臓の発作が原因と発表されたが、葬儀に参列出来なかったアリアの下(もと)を訪れた次期公爵であり、異母兄のルフォードは力弱く笑み血統貴族の筆頭から外される事をアリアに告げた。

正妃でありながら、アリアが子を成せない事を理由にした国王・

グレンダートの厳命だと言う。

命令がなかったとしても、急逝したセイィータ公爵・アルソォンソ唯一の後継者であるルフォードには、セイィータ公爵家当主として魑魅魍魎が跋扈し、陰湿な謀略渦巻く王宮を渡り歩くだけの才覚はない。

血統貴族の筆頭として相応しくないと判断されても仕方ない事だ。

事実、それを憂いたセイィータ公爵・アルソォンソは自身に何かあった場合を想定して、正妃である娘・アリアの後見人として血統貴族第二位のメリレンチェ公爵当主を指名し、セイィータ公爵分家から優秀な者を数人、ルフォードの側近としていた。

けれど、メリレンチェ公爵の次期後継者は国王に愛された少女の後見人になる事を自ら名乗り出ており、その父である現メリレンチェ公爵も正妃・アリアが子を成していない事を国家の憂慮として後見人を降りる事をセイィータ公爵・アルソォンソ急死の報翌日に国王に告げた。

ルフォードの側近の中にも、国王どころか他の有力貴族に排斥されようとしているセイィータ公爵家に見切りをつけている者がいるという。

急逝したアルソォンソの才覚が別格だったせいもあるだろう。

疎まれ妬まれ様とも、尚他者を何処か惹きつけていたアルソォンソがいなくなれば、ただセイィータ公爵として生き残る事に心血を注ぐしかない。

力になれない事を謝罪する異母兄・ルフォードに「気にしないで下さい」とアリアは首を振るだけだった。

グレンダートとの間に子がいれば今後もセイィータ公爵家は安泰だっただろう。

けれど、時の流れは常に変化している。

誰かの望むまま、それとも望まないままかなどとは決して関係なく。

そうして、つい二日前。

国王・グレンダートの口から寵愛している少女が懐妊している事が王宮の全ての人間に告げられた。

その時の衝撃をアリアは、だが静かに受け止めていた。

自分とグレンダートの関係。

そして、グレンダートの少女への寵愛ぶりを思えば、遠からずやって来た現実だったのだ。

遠く聞こえる楽しげで嬉しげな数多の気配は、王宮内で今宵開かれた少女の懐妊を祝う宴である。

そこに正妃・アリアは呼ばれない。

誰も歓迎しない。

正妃ではない者の懐妊が、これ程多くの人間に歓迎されるなど本来ならありえなかっただろう。

そして、正妃の地位にあった上で子は生まれなくてはならない。

その決まり事に従い、子のないアリアは正妃の座から明日にでも

廃される事を告げられるだろう。

父であったセイィータ公爵の喪に服す期間だからと、正妃のままでいる猶予はもう終わる。

胸にあるのは、急逝した父の死の悼みと、父・アルフォンソと親子として過ごした記憶。

齢六つ歳に母が病死した辺りに、それ以前の記憶がアリアにはなかった。

薄ぼんやり霞掛かり、それ以前を思い出す事は出来なかったが、それも今でははっきりとしている。

何故、はっきりとした記憶を持っていなかったかも。

父は常以上の厳しい顔つきで、じっとアリアを無言で見詰めている事があった。

そうして、時折「アルティナン」とアリアを抱き締めて耳元で呟くのだ。

「アリアよ。間違えないで、お父様」

名をきちんと呼んで貰えない事が悲しく、アルフォンソに縋るように何度も言った。

その度に、アルフォンソは無言を貫き、厳しい顔つきを変える事はなかった。

（あぁ、お父様）

アリアは、手を引かれて歩きながら父・アルフォンソを懐う。

失っていた記憶の中、母・チェリエナと微笑み合っている父を、異母兄・ルフォードとこっそり覗き見て、そのルフォードと笑い合っている自分。

母を失って以降、感情を上手く面(おもて)に出せなくなっていた自分を厳しく見据えていた父が、どれ程自分を愛してくれていたか。

全て思い出してしまえば、それは簡単に知れて。

長く続く廊下に人気(ひとけ)は少ない。

多くが、今夜の祝宴に駆り出されている。

仮にも未だ正妃のアリアの部屋周りには警備の影さえなく、いっそ何者に襲われてしまっても構わないという国王たちの思考が明け透けに見えていた。

チクリと痛む胸の奥を知りたくなくて、自分を連れて歩く相手の手をもっと強く握った。

ざわめきが少しずつ大きくなっていく。

この先に、終わりが待っていると解っている。

知っていてそれでも、この歩みをアリアは止めるなど出来ない。

（グレンダート様……）

心の奥で呼び掛ける。

ただの一度として、決してアリアを見てはくれなかった夫。

それでも、その姿を一目見る事が出来た日は、ただ幸せな気持ちでいられた。

大きな扉が見えた。
その向こうに煌びやかな祝宴の光景が広がっている。

息を小さく飲んだ。
扉の両脇に控える王宮警備の騎士たちが、近付いて来たアリアたちの姿に気付いて眉ねを寄せる。

呼ばれていない正妃・アリアに問う言葉を、けれど騎士たちは発する事は出来なかった。
瞬時に肉体は硬直し、脇を通り過ぎようとしているアリアをただ石像のようにして突っ立って見送るばかり。

アリアの手を引く相手の空いた片方の手が、重厚な扉に軽く触れる。

本来、数人掛かりで開閉される扉は難なく開いて、光の渦でアリアの眼を射す。

「正妃・アリア＝ヴァイス＝クロス＝セイィータ。さぁ、お前の最後の舞台だ」

そうだろう、アルティナン――――――。

囁くように告げる相手に、アリアはしっかりと頷いた。
表情の乏しいその顔に、けれど確かに決意を漲らせて。

2　国王・グレンダート

”これ”が己の妻となり、妃となり、次代の王の母・国母となるのだと。

初めて紹介された時の事を正直、グレンダートは殆ど覚えてはいなかった。

十二歳で王族男子として成人扱いされる年、セイィータ公爵に連れられて目の前に現れた子供は、５歳という幼さしかグレンダートに印象を残さなかった。

まして、父王を影で操っていたと言われるセイィータ公爵（おとこ）の娘だ。

まともに眼を向ける事もなく、当たり障りのない紹介と挨拶だけを交わした初顔合わせから十一年。

婚姻を挙げる儀式の只中で二度目の顔合わせをした。

その時、初めてグレンダートはまともにセイィータ公爵の長女・アリアの顔形を見た。

そして、思ったのは（色のない女だ）という事。

感情的にも、女という性別的にも、様々な意味合いで『色』を持たない娘だと思ったのだ。

噂程度には耳には入っていた。

感情のない、仮面のような面をした《人形姫》

他者が操るには過分にも適した感の強い、生きた人形。

己には疎ましいばかりのセイィータ公爵にとって、そのような娘は都合が良かった事だろう。
唯々諾々と、父親に言われるまま生きている様(さま)が思い浮かび、グレンダートは婚姻の最中にも関わらず、嫌悪感に塗れた吐き気を覚えたものだ。

焦げ茶色の髪に焦げ茶色の目。
目を引くような際立った美しさのない、何処か凡庸とした空気を纏っている女だった。

見目の美しい者たちを、齢十三から後宮に召し抱えているグレンダートにしてみれば、アリアと名乗る花嫁は到底食指の動くような女ではなかった。

まして、セイィータ公爵の娘だと思えば尚の事。
《この》女に一筋の情さえ与えてはならないのだと、グレンダートは思った。

己の父であり、先代の王だったギルリアード二世の体の弱さを理由にして、精力的に王宮内を牛耳り操っていたとされるセイィータ公爵。

王太子時代、聡明とも言われていたはずの父が、何故セイィータ公爵ばかりを頼り、誰よりも真っ先に意見を訊き、そうして聞き入れていたのか。

僅か七歳で王となったグレンダートには今だに理解出来ず、何故父王は、己の後見人として、そして己の正妃となる娘をセイィータ公爵の長女・アリアと指名し遺言としたのか。

セイィータ公爵が血統貴族たちの筆頭だという権力の強さを理解は出来ても、後見人や正妃の父という立場を明確にする事が、集中的にセイィータ公爵の持つ権力を強固にし、王宮内外の安定していたバランスを崩すのは良い事ではないはずなのだ。

過去の正妃たちの出自や後見人が齎す権力や利害を紐解けば、セイィータ公爵に娘がいたからと言って正妃に据えるには後(あと)数代は間を置いてこそ、国内外の政治的なバランスは強固に安定する。

権力が一点に集中するのは、国が荒れる原因に容易になりやすい。

そのせいもあって、グレンダートは正妃であるアリアに『情』というものを与えようとはしなかった。

国王と正妃の不仲は、王宮内外に飛び火する。

セイィータ公爵が持った権力などを削ぐには、皮肉にもこの政略的な婚姻は有効だった。

事実、婚姻前まではセイィータ公爵に阿っていた貴族や商人たち、そして軍の関係者ですらセイィータ公爵から離れ出した。

それでも、セイィータ公爵自身が持つカリスマ性は忌々しい事にグレンダートも認めていて、セイィータ公爵の元を離れない者たちもまた多く、そうして政治的バランスは危うさを持ちながらも保たれていた。

そして、グレンダートは出会う。

己にとっては《運命の女》だと、心から言葉強く断言出来る存在に。

……それは、確かにグレンダートにとって《運命の女》だった。

いつものように執務室で仕事をしているグレンダートの元へ、慌しく男が飛び込んで来た。

体躯も立派な男は、興奮した様子を隠そうともせず「おいっグレン！！」と声を掛ける。

「どうした？騒々しい」

顔を上げたグレンダートは、幼い時から学友として長い付き合いのある男・レバンチェックを見た。

年は二つ程上になる乳兄弟でもある。

グレンダートが成人した年に、一般的な成人である十五で軍に入り、今ではグレンダートの筆頭騎士を務める親衛隊隊長でもある。

元々、騒々しい男ではあるが、勤務時間帯にこうまで騒がしいのは珍しい。

事実、室内にいた王佐・ジェネユースが柳眉を歪めた。

「セイィータ公爵が急死した」

「――――――――――」

しかし、次に発せられた言葉に無言でレバンチェックの騒々しい来訪具合を咎めていたジェネユースは勿論の事、グレンダートもまた一瞬言葉を失くす程に驚き、けれどすぐさまそれは喜悦にと取って変わる。

「その話は――」

「事実だ。裏も取れている」

ぬか喜びで終わらぬよう真偽を問うジェネユースの言葉に被せて、レバンチェックはグレンダートを真っ直ぐに見詰めて強く頷いた。

（邪魔者がいなくなった）

正直、グレンダートの頭を掠める感想がそれだった。

グレンダートにとって、邪魔で邪魔で仕方のなかった存在。

特にそれを強く感じる人間は二人いて。

その内の一人が死んだと、腹心が告げる。

「死因までは、はっきり調べがついていないが、外傷はひとつとしてなかったとの事だ」

政敵とはっきり言えるセイィータ公爵の屋敷には、レバンチェックの息が掛かった間諜が長年潜り込んでいる。

今まで、これといった弱みにも脅しにもなるようなモノなど何一つとして見つからなかったが、こうした知らせは隠匿される事なく、真っ先に耳に入る。

グレンダートの頭の中を様々な思惑が駆け巡る。

自然死であろうがなかろうが、死を隠される事以上にあからさまに他殺、それも暗殺を示唆するように国内外に広まるのは不味い。

王族・貴族の突然死など特にそうだ。

真偽など関係なく、多少のスキャンダルを必ず伴う。

まして、セイィータ公爵と国王であるグレンダートは、ここ数年表立って対立していたようなものだったから尚の事。

噂話の話題を囁かれる程度に提供するのは構わないが、その《死》を使って混乱を招かれるのは頂けない。

未だ少なくはないセイィータ公爵の信望者たちに下手に動かれるのは不味く、水面下で虎視眈々と利権を狙う狸共に付け入る隙を与えても不味い。

目まぐるしく、けれどすぐさま対策を練ったグレンダートは、セイィータ公爵の死を公表するよう告げ、そして国王派に不利にならら

ない噂話を付属させるようにも命じた。

セイィータ公爵の突然死は、心の臓の発作である事。

しかし、「もしかしたら、毒を盛られたのかもしれない」という事。

そして、毒を盛ったと影で噂されるだろう主役として、グレンダートが常日頃から目障りに思っている狸の中から数人名前を織り交ぜて数種類噂を流させる事。

セイィータ公爵を表立ってではなく、裏で妬んでいた狸を選別する事。

また、セイィータ公爵の死に因って得する者の名前も流す事。

暗殺ではない、という噂もはっきり流させる事。

――――――――など、幾つかの指示を出す。

それらは、スキャンダルを好む者たちの瑣末な噂話程度として留(とど)める事が最も重要だった。

あからさま過ぎる他殺の示唆は頂けないが、噂話を囃す嘴を閉ざさせる事は出来ない。

だからこそ、逆にそれを利用して、囀るばかりの人間の好奇心を満たし、かつ国王派に多大な疑念と不利を齎してならない。

セイィータ公爵の死因の真偽がどうあれ、表立った政敵ともいえる自分たちを追い詰めるような噂話は徹底的に統制・操作しなければならず、今回など特に慎重に噂話をこちらの手で手綱を取り切らなくてはいけないのだ。

「公爵側の人間で、すでに動いている人間はいるか？」

「いいや、今はまだいない。側近の何人かが屋敷に呼ばれている最中だ。だが、すぐに動くのは目に見えている」

「確かに」と、グレンダートは頷いた。

グレンダートがセイィータ公爵を疎ましく思っていたのは公然の秘密だった。

国外から付け入らせない為に、隙を埋めるが如く体外的には友好的ではあっても、セイィータ公爵の娘でありグレンダートの正妃であるはずのアリアの扱われ様を見れば、両者の仲など簡単に読めてしまえる。

外交に関して、セイィータ公爵と手は組んでも、それ以外でグレンダートがセイィータ公爵やアリアに関して譲歩してみせた事はない。

これで、グレンダートが国の頂点たる王として、力量不足なり、何やら人間的にも問題がある人物であったなら、セイィータ公爵も国王派から蔑ろにされるような事態にはならなかっただろう。

齢七歳という幼さで国王となって数年ならいざ知らず、幼さを理由に支持（サポート）される必要などない程に、国王としての資質をグレンダートは持ち得ていた。

しかし、それは歴代の国王の中でも突出したものではなく、また愚を伴うような能無しでもなかった。

それが結局、『王』としては平均的で平凡であるとグレンダートは気付いていない。

勿論、国内外の問題を安定させたまま平時を保つ能力は、英雄や賢王になれずとも素晴らしく有能である事には間違いはない。

また、グレンダートを補佐する周囲の人間の能力も高かった。

けれど、それだけだ。

国の安定を長期で保ち続ける才能は、英雄や賢王よりも賞賛されてしかるべき事であろう。

しかし、そこに別の第三者がグレンダートたちの知らないところで深く関与し、国の安定を強固にしていた事を知らずにいたのは、グレンダートの愚かさだと。

一体、誰が気付けただろう。

グレンダートは、国内外で高評価されている若き王だ。
その齢すら未知数を秘めていると思わせ、精力的に王として政務に取り組んでいる姿は周囲の人間を惹きつけるカリスマ性を見せている。

また、グレンダートの政治手腕は国民に見える形で幾つもの結果を出しているのだ。

故に、グレンダートに阿る者、周囲で働く者、王の下生活する民人。
様々な人々に、グレンダートにセイィータ公爵はいらないモノと思わせ、またグレンダート自身もセイィータ公爵という後見人などいらないと思わせてしまっていた。

それは、グレンダートだけを愚かとは言わせては憐れであったろう。

しかし、それはグレンダートが拒絶し否定し続け、彼(か)の言葉を聞き入れようとはしなかったが故の結果だ。

少しでも譲歩してみせれば、何か違っていたのだと。

グレンダートは、己を深く後悔する日を知らず。

「それで、正妃はどうするつもりだ？」

レバンチェックが問う声に、嘲笑めいた歪みを唇に浮かせ。

「あれとは当然、離縁する。所詮、お飾りの妃だとしても今後も正妃として据えておく必要などもうありはしないだろう」

「それでは、彼女が次の正妃でよろしいですね？」

ジェネユースが確認する。

「愚問だ。まして、彼女は現在確認されている唯一の《眷属》だ。誰一人として文句は言わない」

「今まで正妃には、皆文句ばかりだったな」

何故、アリアが正妃であるのか？

などと。

疑問ではなく、陰口として公然にも囁かれていたのは周知の事実だ。

「それでは、セイィータ公爵側の人間が何を画策しようと無駄になるよう速やかに正妃交代をしてみせましょう」
「ああ、誰にも抗議一つ言わせない」

ジェネユースに、清(すが)しい笑みを零し、グレンダートは愛しい女の姿を脳裏に描(えが)いた。

陽の光によって、時折薄っすらとした金に見える赤茶色の髪と、緑を湛える薄い色彩の目。
可愛らしい顔立ちで常にグレンダートに微笑んでくれる娘。

愛しさが胸に込み上げ、グレンダートの浮かべる笑みは自然深まっていった。

3　愛妾・ミアリリス

許されるものではない――――――と。

怒り狂う感情はそう零した。

愛しい男の正式な妻となった女の、その姿を見た瞬間。

何故、こんな凡庸な女が陛下の妻だというのか。

権力を以って成された婚姻だと、誰もが口にしていても、だからと言って許すつもりなどなかった。

自分の生家が出自が、様々な要因たる権力が正妃となった女の上をいっていたならば、その座は問題なく自分のものになったのだと。

頑なに信じていた。

お飾りとはいえ、正妃は正妃。

その女に陛下の寵愛がなくとも、その座にいるというだけで正妃・アリアを嫉妬に狂わずに見られようはずもない。

様々な公式の場で、必ず陛下の隣に添う女を何度心内（こころうち）で八つ裂きにして来た事か。

ミアリリスは、手にした華奢な扇をぎりぎりと握り締めた。

繊細な作りが容易に軋んで歪んだが、気にはしない。

己を着飾る為の所詮、替えの利く小道具のひとつ。

己を華やかに見せ、可憐に見せ、妖艶に見せ、魅力溢れる《女》を仕立てあげてくれる小道具のひとつひとつに妥協した事はなく、

金に糸目などつけなかった。

幼き頃より、一目見た瞬間から恋焦がれて来た陛下の寵愛を他の誰よりも一滴でも多く得られるのならば、どのような種類（タイプ）の女にもなってみせた。

時には無垢な少女となり、時には色艶溢れる美女となり。

閨の中では、大胆な娼婦にもなった。

陛下がその日その時、どんな「女」に食指を動かそうとしているのか機微を察して、幾らでも変化して演じて来た。

だから、尚の事思った。

権力で座を得た正妃など、いずれはそこから引き摺り下ろされ、当然己が座るはずなのだと。

ああ、ああ。

愛しいグレンダート陛下。

この身を焦がし、この心を翻弄する美しい人。

信じていたのに、ひたすら待ち侘びていたのに。

どうして、笑顔を向けられるべきが己でないのか。

どうして、愛しいと言葉を惜しみなく囁かれるのが己ではないのか。

どうして、隣に立つべき寵愛深き女が己ではないのか。

正妃さえ退けられたなら、全ては叶うと信じていた。

なのに、それなのにどうして――――――――――――。

ミアリリスは、嘆きと哀しみを重なり合わせて深くて濃い憎悪と怨嗟に変える。

許さない、許せない。

狂った思考で恋焦がれる。

たった一人の男に。

嫉妬に塗れた心の醜さで、己が犯した罪など知らぬとばかりに仮面を被り、今日もまたしとやかな淑女であり続ける。

後宮の女に与えられる様々な特権は、結局のところ様々な制約に

縛られている。
身内に会うのさえ、決められた場所で決められた時間内のみで、侍女を伴うかどうかは自由であるが最低でも三人の女官が傍に控えている。

当然、後宮内はその華やかな宮の主人たる国王陛下以外の男性は立ち入り禁止である。
故に、国王以外の異性と会うのは、後宮から王宮に繋がる中間地点に設けられた宮であり、事前の届け出がない場合は火急でもない限り後宮から出る許可など容易にはおりない。

宮にある一室に足を運ぶと、週に二度、必ずこちらへの面会を申請しているセバンジョシが優雅な仕草で腰を折り、淀みない動作で上座のソファへとミアリリスを導く。

相変わらず、貴族として完璧な無駄のない所作の従兄にミアリリスは満足の息を吐いた。

「ご機嫌は如何かな？我が麗しの姫君」
「今のところ、よろしくてよ。お従兄（にい）様」

先日、新たに購入した南方小国伝統の飾り細工が施された扇を広げ、抑揚に答えた。

「おや。また新しい扇だね」

それを目に留めたセバンジョシが仕方ない子だね、とばかりに困った笑みをその優美な顔に浮かべる。

ミアリリスが、扇を力強く握り締める事でよくダメにしているの

を実の兄妹のようにして育ったセバンジョシは知っている。

従兄が零す苦笑さに、ミアリリスは「一目で気に入ったからですわ」と敢えて言った。

壊した替わりではなく、気に入ったから新しい扇が増えたのだと言えども、長い付き合いの従兄が解らない訳ではないと知っていて、それでも見栄を張るように口にしてしまうのは、己の嫉妬深さが醜いものだと無意識に思っているからだ。

ミアリリス＝ノルバード＝カロリングは、後宮に収められた三十ある《華》の一輪だ。

それも、貴族女性の成人年齢・十四を待たずに後宮入りした美貌の持ち主であり、曾祖母は四代前の国王の異母妹にあたる。

国王の子であろうと庶子の出は本来、一代限りの爵位で貴族ではなくなるが、才覚などに因っては新たな地位や爵位を与えられる事もある。

女児に関しては、婚姻に拠るものが大きい。

事実、ミアリリスの曾祖母は当時のカロリング伯爵に見初められて伯爵夫人として生涯を過ごした。

もし、曾祖母が一代爵位で終わったなら、ミアリリスは今頃地位も肩書きもないただの庶民だったかもしれない。

そのような国王の庶子たちは多い。

一方、ミアリリスの目の前に優雅に座りお茶を飲むセバンジョシは、現在一代限りの爵位持ちだ。

母親は、ミアリリスの父である現・カロリング伯の実姉であり、父親は先代国王・ギルリアード二世だ。

国王・グレンダートとは腹違いの兄弟であり、六日違いでグレンダートより先に生まれた異母兄でもあるが、母親が正妃ではなく愛妾でしかなかった為に、当然王位継承権を持ってはいなかった。

それ故に、ギルリアード二世の逝去に伴い、母親と二人、カロリング伯爵家に引き取られ、そうして育てられた経緯から、ミアリリスが物心つく頃には近くにいたセバンジョシとは仲が良い。

「ところで、陛下の渡りはやはりないのかい？」

「――――――……っ」

お茶を飲んで一つ息を吐き終えると共に、唐突に話題を出され、ミアリリスの手がピクリと跳ねる。

極力平静を装い六つ年上の従兄を見た。

そこには優しげな笑みにほんの少し哀れみを滲ませた顔がある。

カッと、胸の内側から熱が生まれたがそれを無理矢理押さえ込んだ。

「いやですわ、お従兄様。何を突然」

「僕は心配しているんだよ。愛妾のまま、お前という美しい華を枯らせてしまうのは惜しい」

柔らかな声音に潜む憐憫が、ミアリリスの胸を突く。

まるで、枯れる事がすでに決まってしまっているような空気を滲ませる。
優しさで包んだ哀れみは、時に酷く不快で最悪な凶器だ。
「渡りがないのは、今だけの話ですわ。陛下も物珍しさで構っているだけでしょう」
まるで、自分に言い聞かせているような言葉だとミアリリスは気付かずにセバンジョシへ言い聞かす。
その声音が微かに震えていた。
三十ある《華》の中で、誰よりも陛下の寵愛を受けていたのはミアリリスだ。
正妃・アリアが廃された暁には、ミアリリスが次の正妃候補の筆頭だというのは多くの宮廷人に知られていた。
それが覆されたのは、凡そ半年前。
ぽっと出の女が、グレンダートの寵愛を《華々》から一手に奪い取った。
正妃に見向きもしないグレンダートだが、後宮に《華》として入れられた愛妾たちの持つ背景を軽んじる事なく、ほぼ全ての《華》に適度に情(みず)を与え、愛妾たちが齎す政治的バランスの舵を上手く取っていた。
それでも、他の《華》たちより頭ひとつ成長する《華》であったのは、それだけミアリリスがグレンダートから寵愛(みず)を与(そそが)えられていたからだ。

グレンダートの《男》としての欲や矜持をミアリリスは上手く満たし続けていた。
実家の持つ政治的権力は、必ずしも他の《華》たちより一番上だとは言えなかったが、王家の血筋に繋がり、かつ国内随一の大商家出の母を持つミアリリスの財力は国内でも五指に入る。

グレンダートの寵愛を得る為、そして得続ける為に己を着飾る全てには王宮から支払われる決まった金額の王廷費では勿論足りず、母方の実家の援助を多いに受けていた。

当然、大商人の祖父もミアリリスが正妃となる事を強く望んでいる。
正妃の子のみが王位継承権を持つのだから、その王太子の外祖父という地位が齎す利潤を考慮せずとも当たり前過ぎる美味しさに、幾らでもミアリリスに出される金銭は惜しみなどされない。

そして、ミアリリスは商人である祖父から人間関係の駆け引きや心理術・演技について様々な手解きを受けていた。

それはミアリリスを後宮一の《華》として育てるのに十二分に役立っていたし、また祖父がミアリリスに与えた知識や人脈（コネ）は素晴らしいものがあった。

事実、後宮内から糸を引き、セイィータ公爵につく者たちを減らすように仕向け、正妃・アリアを孤立させるのに噂という名の情報を操った。

後宮内を掌握するのも時間は掛からなかった。

時には、手に入れた毒でライバルに成りえそうな《華》はそうそうに芽を摘み、厳しい審査と試験を通って国王陛下のみに忠誠を誓ったはずの女官や騎士たちの中にさえ己の息の掛かった者たちを多く配した。

この室内にいる三人の女官たちもすでにミアリリスの手足と化した者だ。

面会の場での会話は一言一句、全て後宮を取り仕切る女官長に報告され、そこから更に上に報告されるのが決まりだが、仮にここでセバンジョシと睦み合ったとしてもそれが外部に漏れる事はない。

尤も、ミアリリスの全ては国王・グレンダートのものである以上、グレンダート以外の男と性的に触れ合う事など絶対にありえない。

「物珍しさ、ね」

一つ溜めた息で零すセバンジョシに、ミアリリスの柳眉が歪む。

「何が仰りたいの？お従兄様」

常にミアリリスには優しい従兄は、だが時折ミアリリスには不可解な人と思わせる何かを持っている気がする。

しかし、自分に牙を見せて、あまつさえ剥くような人ではないと。

ミアリリスは、セバンジョシに先を促した。

「物珍しさだけでは、《眷属》の相手は出来ないと思うよ」

「……《眷属》だからこそ、相手をなさっているだけですわ。陛下は」

《眷属》が持つ重要性を解っていない訳ではないが、重要だからこそ、グレンダートが相手をしているのだと、ミアリリスは思う。

そう、思わなければ今にも叫び狂い、嫉妬の炎で全てを燃やし尽くしてしまいたくなる。

「しかし、《眷属》が現れてからだろう？後宮の《華》たちの誰一人として陛下の渡りがないのは」

柔和な声音で、嫌な事実を綴られ、ギリッとミアリリスは強く奥歯を噛み締めた。

「《眷属》に対する陛下の寵愛は傍（はた）から誰がどう見ても深い。今までの《華》への寵愛がいっそ児戯であったのではないかと思える程にね」

「……」

「それに、噂では陛下は《眷属》に対して《セレの実》を飲ませていないそうだ」

「――――――――――っ！！」

瞬間、ミアリリスはその言葉の内容を上手く理解出来なかった。

真っ白になった思考は、だが徐々に赤黒く染まりゆく。

ぎりりと、手の内の扇を握り締めれば軋みが上がる。

グレンダートは、愛妾に子を産ませるのを厭う――――それはよく知られた話だ。

父王であったギルリアード二世でさえ、三人いた愛妾の中で成し

た子はセバンジョシ一人。

先々代の国王や正妃、そして愛妾たちとの間で酷く醜い争い事があったというのが凡その理由で、だが一体何があったのかはミアリリスの情報網にさえ引っ掛からなかった。

ただ、正妃が座を下ろされ愛妾の一人がその座に座ったという事。その愛妾上がりの正妃が、現在の太王太后陛下だ。

詳細を隠匿された醜聞をグレンダートが知っているかどうかは別として、グレンダートは閨の行為で必然的に生まれて来るだろう子供の存在を最初からないものとする為、愛妾たち全てに避妊薬であるすり潰して精製した《セレの実》を毎日服用するのを義務付けている。

数年前、それでも懐妊した《華》がいたが、その《華》は或る日忽然と後宮から抜き取られたように消え去った。

ミアリリスが、排除する為に動こうとした矢先だ。

《セレの実》を服用しているのに懐妊したのは他の男と通じたからとして密かに処刑されたのだと、集めた情報で知った。

つまり、後宮の《華》である以上は決して懐妊はありえないし、懐妊してはならない。

《眷属》とて、今はまだ後宮に収められた《華》の一輪。

正妃以外の女には決して《妃》の尊称は与えられず、愛妾は正妃にならなければ何処までも愛妾であり、子を成す事は許されない。

だと、言うのに。

ミアリリスは、己の頭の芯が酷く痛みながらも燃え滾るどす黒い熱で占められたのを知る。

バキッと、手の内の扇が無残に折れた。

壊された繊細さは、いっそ哀れな程に美しくも見える。

「……ねぇ、お従兄様。その話、もっと詳しく教えて下さらないかしら」

ああ、ああ。

何て邪魔なの。

何て、煩わしい蟲なの。

ミアリリスは思う。

正妃・アリアも《眷属》の女も、排除し始末しなければいけない、汚らわしい蟲だと。

乞われたセバンジョシの柔らかな笑みに、いっそ純粋無垢めいた笑みを返してミアリリスは唇を吊り上げた。

3　愛妾・ミアリリス（後書き）

国王の祖母は太王太后。
敬称は陛下。

自分なりに調べた結果ですが、もし太王太后陛下という尊称及び敬称が間違っていた場合、教えて頂ければ幸いです。

4　実兄・ルフォード

引き合わされた時。
母となる女性の腕の中に抱かれていた幼子の真っ直ぐな眼差しに何を見たのだろうか。

ただ、守ってあげたいと望み、けれどずっと一生を守るのは決して自分ではないのだとも同時に気付き。
それでも、父と名乗ったセイィータ公爵にそっと背中を押されて、おずおずと近付いた。

だが、どうしてもその幼子に触れる事は出来ず、この己の手をどのような行方へと導けばいいのか解らなくて知らず幼子を見詰めてしまっていた。

すると、こちらの躊躇いと戸惑いに気付いてか無意識か。
柔(やわ)い小さな掌が、そっと伸ばされる。

それを視界一杯に見て、（あぁ……）と。
底知れぬ感情の漣に突き動かされてこちらからも掌を伸ばした。

触れた温もりと小さくて可愛らしい掌をやんわりと握り込んだ。
「……はじめまして、アリア。僕はルフォード。君の兄だよ」

血の繋がりは半分だけど。
それでも、そこにある温もりは手放し難(がた)い程、胸の奥をそっと照らして。

「これからどうか、末永くよろしくね」

アリア、アリア。
僕の可愛くて愛おしい唯一の妹。
けして真実は優しくなくとも、君は僕の大切なたった一人の妹。
だからどうか覚えていて。
哀しみの末に君がそれに溺れる事はないと、僕は強く言えるから。
君の幸せは、もっと別のところにある――――――と。

いっそ、呪われるがいい。
僕の大切な妹を蔑ろにするばかりの国王も、その周囲の人間も。

「一体、どれだけの人間がお前の本性に気付いているのだろうな？」
不意に背後で吐かれた言葉に、ルフォードはうっすらと笑みを浮かべる。

先日、敬愛していた父・アルフォンソ＝クラン＝セイィータが急逝した。

慌しく激変する周囲をぼんやりと見詰めるばかりの気の弱い後継者であるルフォードは、父の遺体が納められた柩を目の前にして、ただ立ちつくす事しか出来ない。

――――――――――そう、周囲の人間たちは思っている。

新たなセイィータ公爵を名乗る資格を持つ正当な後継者。
だが、生前父・アルフォンソが厳選してルフォードの側近としていた者たちの大半は、落ちぶれていくだけのセイィータ公爵家にさっさと見切りをつけて早速動いている事だろう。

アルフォンソに能力を見出されて日の目を見た者たちも多くいたが、感じた恩義を返すにはアルフォンソの急逝に伴う公爵家の目に見えている没落に好き好んで付き合い続ける者はあまりにも少なく、またルフォードの異母妹（いもうと）であり正妃・アリアに対する国王・グレン

ダートの様(さま)を思えば、正妃の実家に組する事で国王の不興を進んで買おうとは誰も思わないだろう。

離れ行(ゆ)くだろう周囲の人間たちをルフォードは父・アルフォンソが生きている頃から気付いていたし、それは父・アルフォンソも同じ事だっただろう。

本来なら、目を掛けた側近たちの裏切りや公爵家の没落の行く末に憔悴や絶望を感じ、どんな事をしてでもそれらを回避する為動かなくてならないのに、アルフォンソは或る日を境に表向きだけの対策しか取らなくなったのをルフォードは間近に見て知っていた。

一体、父に何があったのか？

そうは考えても、父が本気で対策をたてないならたてないで、きっとそれなりの理由があり、心配する必要などないのだと。

ルフォードは思い、そしてそれは間違いではなかったのだ。

「僕が簡単に気付かれてしまえるような人間に思えるんですか？あなたは」

柩に眠る父の姿を見下ろしたまま、ルフォードは返した。

振り返らなくても誰だが解っている。

声を掛けられる前から、感じ取った気配はここ数年で身近に馴染んでいるモノで。

それは何処か仄暗く、ひたりとした冷気を伴っていた。

愛想が良く、人当たりの良い好青年という周囲の評判をあっさり裏切る顔こそが本来のものであると、知らされた時には笑ったものだ。

病弱で気が弱く、父親が用意した側近という名の補佐役が何人もいないと時期公爵としてやっていけないと言われる才覚のない若者。

そう思われている自分（ルフォード）と、声を掛けて来た男はお互い様なのだ。

「アルフォンソも、無念と言えば無念か。最後まで見届けられないまま死なねばならんのは」

「そうでもないですよ」

静かに近付いて来る男が、柩を見ているのが解る。

ルフォードよりも、アルフォンソの方が近付く男との付き合いは少しばかり長い。

「父は満足していました。確かにアリアが下ろすだろう茶番劇の幕を観られないは残念でしょうが、それは無念ではないでしょう？」

ぴたりと真横に立ち止まった気配を振り仰げば、有り得ない美貌の主がいた。

己より頭一つ分は軽く高い背丈の男は、それにうっすらと笑う。

「確かに」

「父に後顧の憂いなど何一つありはしませんでしたよ。ただ、アリアが幸せになる事を望み、そしてそれは叶えられるのですから。……ああ、でも唯一気にしていたのは、祖父殿が守って来たこの公爵家が衰退する事でしょうか。父は、祖父殿に多大な恩義を感じていましたから。まぁ、理由を知れば尤もな事ですしね。僕も父とは似た立場ですし、父の気持ちも解らない訳ではないのですが」

「ウィリアスは気にしないさ。あれはあれで好き勝手に生きた人間だからな。ウィリアスは筆頭貴族としての矜持や貴族の義務など、簡単に捨ててしまえるような男だったぞ。ただ、家柄や権力が何を

するにも便利で利用するのに都合が良過ぎたから捨てなかっただけで、足枷になった瞬間には未練なく切り捨てる」
「そういえば、貴方は祖父殿とも付き合いがあったんでしたね」
男の口からするりと出た祖父の名に、ふと思い出す。
「ルフォード。お前は、ウィリアスに良く似ている」
その言葉にルフォードは、頷いた。
父・アルフォンソに引き取られたのは九つの時だ。
それまでは、母と二人、この国の王都から随分と離れた隣国近くの小さな町で生活していた。
母・トリスは裁縫が得意で、それを生業にして生活の糧としていたし、ルフォードは幼いながら、手伝える事は自ら進んで手伝っていた。
片親は、別段珍しい事ではない。
自分が生まれる前は頻繁に近隣諸国では小競り合いが起きていたというし、この国とて例外ではなく、その小競り合いの影響で家族を亡くした者は少なくなかったからだ。
しかし、大きな戦争には発展しないまま、ギルリアード二世が即位するのと前後して国は安定し始めていた。
何一つ変わらない毎日が続いていくのだと。
ルフォードは子供心に思っていた。
しかし、それは母・トリスが病死した事で変わってしまった。
始めはただの風邪だったが、それを拗らせた末の急逝だった。

頼るべき親類縁者に心当たりはなく、齢九つでは孤児院に行くしかなく、実際孤児院に預けられたが、それも半月足らずで父親を名乗るアルフォンソの登場で公爵家の跡取りとして引き取られる事になった。

義母となった女性は優しく、母・トリスを忘れる事はなかったが素直に慕う事が出来た。

引き合わされた異母妹はあまりにも愛しく感じられて、家族として馴染むのは早かった。

義母・チェリエナがその三年後、不治の病で急逝した時は心から悲しみを覚えた。

幼い妹と共に父に抱き締められ、棺に納まった義母を見送った。

それまで、よく笑いよく怒りよく泣いて喜怒哀楽を素直に表していた異母妹・アリアの面(おもて)から感情が消え失せた時は、ルフォード自身の感情も消え失せそうになった。

けれど、本当に感情が消えた訳ではないと、アリアの些細な仕草に見て取れてルフォードは詰めていた息を吐いたのをよく覚えている。

あれから十七年。

それなりに色々あった。

だが、一貫してルフォードが望んで願っているのは、アリアの幸せ。

幸せならば、それで良かったのだ。

「僕も公爵家を簡単に捨ててしまえるんですよね」

父・アルフォンソが折角後継者に据えてくれたのにね――――と、男に零した。

「アルフォンソは、本来の立ち位置にお前を置いたに過ぎない。アリアとて似たようなものだ。親友だったギルの頼みもあっただろうし、ギルの苦悩に引き摺られて、アルフォンソ自身も一時期苦悩しまくっていたぞ」

「父も変なところで義理堅いというか、責任感があるというか」

ギルとは、先代国王・ギルリアード二世の愛称だ。

世間にも身近な人間たちにも、病弱なギルリアード二世をアルフォンソが裏で操っていたと言われているが、実際二人は無二の親友だった。

しかし、その事実を知る者は殆どいない。

実際知っていた人間は今では、ほんの数人を残して全員鬼籍に入っている。

親友だったと語ったとて、信じる者などいないだろう。

それ程に、アルフォンソの存在とその才覚に嫉妬した貴族や周囲の人間に依ってギルリアード二世とアルフォンソの関係は捻じ曲げられたまま、それが真実となってしまっている。

親友だったと語れば、多くの人間に糾弾されるのは間違いない。

今は亡きギルリアード二世を愚弄しているとばかりに。

ルフォードは、明日にも埋葬される父・アルフォンソの顔を見詰めた。

妻であるチェリエナを亡くして以降、常のようにして気難しいげな顔をしていたから、実年齢より少々老け込んで見えたが、生来の実直さを失う事はなく、真偽を先入観や歪んだ偏見で見ない人間から見たら、恐らくアルフォンソほど生真面目さを見せる人間はいないと簡単に気付けただろう。

しかし、王侯貴族などという権謀術数の代名詞とも言える集団の中にあっては、曇りない目を持てる人間など希少であり、残念な事にそんな目を持つ者はいなかった。

まして、ギルリアード二世を操り人形にしていたと言われたアルフォンソの人物像は捻じ曲げられたまま本人は死去してしまった。

「祖父殿は、家を潰しても怒らないのだろうな」

疑問ではない確信めいた呟きをルフォードは零した。

肯定も否定も求めていた訳ではなかったが、生前の祖父・ウィリアスとは結局一目も会った事のないルフォードに、ウィリアスを良く知る男が小さな笑いを漏らして口を開いた。

「家を捨てられる男であり、同時に家を簡単に潰せるだろう男でもあったな、あいつは。目的の為に必要なもの不必要なものを簡単に線引きして、そうした事を決して後悔しない人間だ。家名や地位など、生きていくのに利用出来る有益さがなければウィリアスにとって瑣末な存在(もの)だったさ」

「なら尚更、僕の好き勝手してもいいですね」

「アルフォンソとて本質は、ウィリアスにこよなく近い。恩義故にセイィータ公爵家というモノを壊さないようにしてはいたが、それも所詮はお前やアリアに幸せや利用価値を持たせる事が第一前提だ。アルフォンソの死と共に血統貴族筆頭としての地位は剥奪され、あのボンクラな国王に敵視されている以上没落は明らか。沈みゆく家(ふね)にしがみ付く価値も意味もない。アルフォンソとて解っていて、お前に言い残したのだろう」

脳裏に、父・アルフォンソの言葉が過ぎる。

思うがまま、好きにしなさい――――――――――

父が望んだのは、アリアの幸せ。

そして、ルフォードが望むのもまたアリアの幸せ。

「……まぁお前が望むなら、如何様にもこの家を守ってやるが」

こちらの答えを解っているからこそ、声音にはからかいを含んでいた。

ルフォードは、視線を男にと向けた。

「家はどうでもいいです。僕があなたに望むのは、先祖代々の墓が荒らされない事。祖父殿、そして父と義母(はは)の遺体は共に連れて行く事です」

何処に?――――――とは、訊ねない。

その代わりの様にして男が訊ねたのは、ルフォードの生母・トリスの事。

「母は、あの地で眠る事を望んでいましたから。まぁ、その地が荒れるような事があれば、その時は祖父殿と同じ地に眠って貰いますけど」

母・トリスと共に過ごした地はトリスにとって思い出深い土地だったと言う。

死んだら、この地で眠りたいと時折口にしていた。

事実、トリスを公爵家縁の墓地に埋葬し直そうとしていたアルフォンソは、ルフォードからその言葉を聞くと、トリスの墓はそのままに、けれど身元のしっかりした専属の墓守をつけた。

そして、今この隣にいる男がルフォードの望みを叶える限り、母・トリスの墓を守る者は存在し続けるだろう。

「それでは、一足早くアルフォンソは連れて行こうか」

男がそう言い、軽く片手を振っただけで柩の中から瞬時にアルフォンソの姿は消えた。

そして、すぐさまアルフォンソの姿が現れ出たが、それは精巧に出来た偽りでしかない。

「行きましょうか。今宵、待ちに待った喜劇の幕引きです。あなたも、間近に観たいでしょう？」

男に向けられたルフォードの笑みは、凡庸な見た目に反して壮絶な色香を漂わせている。

今宵の悲喜劇に心躍らせた様（さま）に、男も釣られたように笑みを湛え、ルフォードの左手を持ちあげ、その薬指に恭しく口付けた。

「愛しき我が半身殿。お前の愛する妹の勇ましき姿を共にこの眼に納めよう」

観劇に誘い誘われるようにして、二人はその場を後にする。

残されたのは、本来の主を失った棺だけ。

灯された蝋燭の炎が幾つも揺れ、そうして静寂が訪れた。

４　実兄・ルフォード（後書き）

※ルフォードの立場は、アリアからしてみれば母親が異なる『異母兄』ですが、色々と調べたところ両親を同じくする『実兄』という以外に、父もしくは母が同じ場合でも『実兄』、または血が繋がっている実の兄としての意味で『実兄』ともありましたので、サブタイトルには『実兄』としました。

※追記・１０／２３　数箇所修正。また『棺』と『柩』に関して修正しました。最後から二行目は、偽りの遺体が入っている状態なので『柩』から『棺』へ変更しました。

5　愛妾・サンドラ

この女性が、正妃……。

噂に聞いた通りそのままに、その面(おもて)には、こちらに対する感情や感想の一片すら滲ませない仮面のような《無》があった。

事前に聞き知っていたはずだが、実物と間近な距離で対面してしまうとあまりのその《無さ》に知らず息を飲んでしまっていた。

昨夜、国王陛下と初夜を過ごした己の体に残る気怠さを知られている気がして、感情の制御(コントロール)に物心付く前から徹底的に慣らされていたはずの王族としての矜持が揺らぐのを覚えた。

羞恥――――常に笑顔を絶やさず、また感情や表情・仕草を自己の望むまま最良な形で表にしてこそ完璧な王族としての生き方で義務と教えられていたのに。

一人の女性とただ対峙しただけで、激しく居た堪れないのは、本当に何故なのか。

答えに辿りつく前に、徹底して叩き込まれた反射として優雅に挨拶の為に腰を僅かに下ろし、すっと頭を下げ挨拶を口にしていた。

しかし、その間も脳裏にはどうして自分がこの女性に対して羞恥を覚えてしまったのか。

それを疑問としながら、気怠さを誰にも気取らせないよう完璧に気をしっかり持っていたはずなのに。

耳の奥に、ざわざわとしたモノがある。

間違えてはいけない――――と。

何を？

自問したが、答えに行き着けない。

奇妙な緊張が湧いた。

今や、この大陸中で最も水と緑を残している大国の正妃でありながら、その君主たる男に蔑ろにされていると国内外の一部には公然の秘密として知られている哀れな女。

侍女たちの口から、この国に訪れる前から噂話として何度も聞いてはいたが、なるほどと納得してしまうには至らない。

けれど、納得しないからといって自分にはどうしようもなく、また関係もなかった。

正妃になれるならそれに越した事はない。

けれど、それ以上に優先すべきはこの国から永続的な援助を反故されないよう努める事。

己は後宮に新たに生けられた《華》の一輪。

一日一日を過ごす内に、根付ていていくのだろう。

形式的で儀礼的な挨拶で、この場を辞す。

哀れなお妃様。

けれど、同情はしない。

望んでこの後宮に入った訳ではない己だが、正妃に同情出来るような立場ではなく。また、正妃はそれを望みもしないだろう。

ただ、閉じられゆく扉の音を耳にしながら、ふと思ったのはただ一つ。

特別な鳥籠や牢獄よりも、この堅牢な後宮(おり)からいつか自らの足で出て行けたらいいですね――――――と、そんな事。

正妃自身の意思で、自らの足で、この狭小な世界から……。

この国を裏から支えていたセイィータ公爵が亡くなったというのに、この後宮にあってさえその死は大半の人間に喜びとして迎えられた。

表向きは、その死を悼みはするが、これで正妃である女性は完全

な後ろ盾を失ったのだ。
後見人に指名されていたはずの血統貴族第二位のメリレンチェ公爵さえ、正妃の後見人を引き受けるつもりはないと国王に告げ、正妃へ追い打ち掛けるようにその息子たる次期メリレンチェ公爵が《眷属》の後見人に名乗りを挙げれば、その場でどちらもが国王からすぐさま認可された。

一刻と経たずに王宮内外に公表された速さからして随分と前から予定されていた事だったのだろう。
それが、セイィータ公爵の急逝で早まったのだ。

サンドラは、溜め息を零した。

一体、どれだけの人間がセイィータ公爵の死を真実悼んでいるのだろうか。

そう思うと共に、己の主(あるじ)でもある国王・グレンダートの《眷属》への寵愛ぶりに国王派及び《眷属》擁護派の人々の多さを考えればあまりにも少ないだろうと容易に想像出来る。

（なんて事かしら……）

この国の影の立役者を失い、それは一体どれ程の損失となったのか。
気付く事も気付こうとする事もしないのだろう。

それを憂い、サンドラは眼を伏せた。

尤も、セイィータ公爵の多大な功労を知る者はあまりにも少なく、そしてセイィータ公爵自身表立って行動はしていなかったのだから、

仕方ないと言ってしまえばそれまでなのだろうが。

「どうされました？姫様」

陶磁のカップを手にして宙に浮かせたままのサンドラに、そっと声が掛かる。

思考の縁（ふち）に掛かっていた意識が呼び戻され、サンドラは「何でもないわ」と首を振った。

国を出る時に唯一付いて来てくれた侍女のサリーが、その返答に納得いかない顔をしている。

五歳年上の侍女とは物心付く前からの付き合いだ。

元は、サンドラの母の遠縁の娘で、サンドラが生まれる前からサンドラの母が生む一番最初の子の侍女となる事が決まっていたサリーである。

その為の教育を徹底的に受けていて、サンドラ至上主義だ。

そして、サンドラが家族以外で心から信頼し、信用出来る唯一の存在であるサリーには己の性分を良く知られている。

「セイィータ公爵がお亡くなりになった事で、この先この国はどう変わっていくのか気になったのよ」

だから、結局心内を言葉にした。

サンドラのそれにサリーが尤もとばかりに大仰に頷く。

「姫様の仰る通り、将来（さき）を憂いてしまわれるのも致し方ないのかもしれません。ですが、私たちが憂いたとて、この後宮に携わる人間たちからしてすでに眷属様一色。私たちの意見に陛下は一瞬き程の時間も耳を傾けはしないでしょう。それこそ、致し方ない事でござ

います」
「それはそれで、色々と問題があるのだけど」
陛下も困った方ね――――――そう零したがサンドラは、サリーが口にした「致し方ない」という言葉に多大な憂いと諦めが含まれているのを理解していた。
自分もまた「致し方ない」と諦観している。
故国からこの後宮に送られてすでに四年。
大陸の国々にとって年々深刻化していくばかりの水不足問題故に、未だ安定した緑と水を持つこの国に縋らなければいけないのもまた致し方ないのだ。
その資源を求めて、先の国王・ギルリアード二世が即位してから数年程までは近隣諸国と小競り合いが繰り返されていた。大規模な戦争に発展しなかったのは、幸いだっただろう。
本来、サンドラは故国の第一位王位継承者だった。
しかし、永続的な食料援助を求め、この国の属国となる証としてグレンダート王の後宮に入った。
故国は、この国の南方、他の一国を挟んだ砂漠の小国だ。
年々砂漠化の速度が早まっている。
大陸中で水や緑が不足している原因は、誰もが知っていた。
二百年程前に起こった大規模な水蛇狩りに起因する。
元々、希少種の水蛇は雨と水の神・サライライサの涙が生み出したと言われる幻獣種でもある。

国によって信仰する神々はそれぞれだが、元は複数の上位神の足許で創造されたとされるこの大陸は常に神々の息吹や存在を感じる事が出来た。

事実、水蛇狩りが起こる前は度々、下位神とはいえ神の降臨があったというし、神々の僕(しもべ)である精霊たちも頻繁に姿を見せたという。

そして、水蛇は新たに水が生(わきでる)まれる処に生息する。

安定した水が湧き続けるようになると、水蛇は新たな水の生まれる別の場所を探して移動を繰り返すと言われる。

故に、水蛇は信仰の対象でもあった。

だが、それが乱獲されるに至ったのはある魔道使(まどうし)が偶然知った事に因る意外な効能に、王侯貴族や裕福な人々の欲望が肥大してしまった為だった。

うっすらとした青をその銀の艶やかな鱗に纏う水蛇の、その尾と頭の血肉を食せば忽(たちま)ち十は若返り、老化速度が緩やかになったという。

事実、水蛇の尾と頭の血肉を巡って醜く争った末の勝者たちはその通りになった。

だが恩恵に与れなかった者たちの妬み嫉みによって、勝者たちは次々に殺されたのだから、不老長寿を手に入れたはずが本末転倒という最後は皮肉以外の何ものでもない。

水蛇が狩られた事で、新たに水が生まれていた土地からはみるみる水は干上がり、連鎖して雨が降らない日が続き、緑は枯れ始め、土地に作物も育ち難(にく)くなった。

安定していた水場も、忽ち減少し始め、そこに至って水蛇狩りを

行った人々は大いに後悔したが、全ては遅過ぎた。
すでに水蛇はその姿を人々の前から消していた。
元々、滅多に見る事の叶わない希少種だ。
契約や友愛によって人間に《力》を貸していた精霊たちも徐々に消えて行き、その姿を眼にし意思疎通する《力》を持つ精霊使としての素質ある人間は生まれなくなってしまった。
辛うじて、精霊たちの気配を感じられる人間が時折生まれる程度だ。
神の怒りを買ったのだ。
このままいけば、この大陸中が干乾びて滅び逝く。
だから、国々は生き残る為に模索し続けてもいるのだ。
その生き残る為の手段のひとつが、大陸二十三国の中で砂漠化の速度が一番緩やかであり、唯一その砂漠化から緑化に転じようとしているこの国から協力や同盟を得、必要ならば膝を付き頭(こうべ)を垂れ慈悲や援助を乞う事。
だから、サンドラは王位継承権を自ら放棄し、この国に来た。
望んで後宮の《華》となりたかった訳ではないが、故国の人間たちの中でこの国に対して恭順を示すに最も適した人間が自分であったというだけの話。
サンドラは、国王・グレンダートに対して愛情も親情も持ってはいない。
最初の頃は、それを持とうと努力もしたし、持てるのではないかと自分の心が変化してくれる事を期待もしていた。

けれど、後宮というある意味国の中枢で最も陰を持ち、権謀術数渦巻く暗部と身近に接して、この国をこの国の上層部の人間を知れば知る程に諦観してしまったのだ。

なんて、浅はかな子供のようなのだろう――――――と。

この国の磐石となり、この国を支え、この国の行く末を幾重にも想定してそれらに対して様々な臨機応変さを考え続けて奔走し続けていた人物の本質を見ようともしなかった多くの人々に。

怒りを通り越して呆れ、そして憐れまずにはいられなかった。

それは先入観の殆どないサンドラだったから気付けた事なのかもしれないと、思った事もあったが、実際のところセイィータ公爵は確かに表立って行動はしていなかったが、後宮にいるはずの自分ですら調べてみれば簡単に知れた事だった。

それなのに、それを知ろうとしない、知らない、それとも気付かないふりをしているのか。

どちらにせよ、真実を見る眼は誰も彼も多くが雲っているという事が最大の問題だった。

そこに来て《眷属》の存在は、安心感をこの国の人間に与え、大いに気を抜かせてしまっているだろう。

砂漠化の危機や水不足の憂いに頭を悩ませる必要もなくなり、それどころか大陸全土を支配するのも容易だ。

それを齎す《眷属》の身を各国が虎視眈々と狙っているからこそ、

国王は一刻も早く眷属に愛妾ではなく、正妃という確固とした地位を与えたいのだろう。
まして、正妃の立場で《眷属》が国王の子を産めば、尚の事この国は強大となる。
《眷属》という国母を持ち、次代の王が《眷属》の血を引く事実が、大陸全土に与える影響はあまりにも大きい。

サンドラは、止めていた手を動かし、すでに冷めてしまっている紅茶を乾(ほ)した。
サリーが淹れ替えましょうか、と問うたがそれを断ったのはこの一杯さえ贅沢な物だと解っているからだ。

耳にざわめきが生まれる。

ざわめきを生むのは、風の精霊。
何をざわめいているのか知れないのが、サンドラには残念だ。

姿を見る事も声を聞く事も出来ない。
ただ、風の精霊が傍近くにいると知る程度の事。

（ああ、でもそうね……）

心当たりがないでもない。

大陸には元々、神の足許で創造・建国された国が大小合わせて二百数十あったという。
それが様々な変化や環境・争いに因って淘汰され、現在は二十三国に落ち着いているが、消えていった国は数多あっても、残っている国々は建国当初からの名を名乗っている。

各国、それぞれ幾度となく王朝は変わっても国名だけは変わらない。

そんな中で唯一、国が生まれた当初からただ一度として王朝が変わった事のない国。

それがサンドラの故国だった。

眩暈を覚えそうな程に永い歴史を持つ古国・エルドラーデル。

だからこそ、王朝の交代劇のない古き国にしか今となっては残っていない伝承がある。

王から第一位王位継承者に、そして国王となったその継承者から次の国王となる者へ。

そんな人間しか見聞き出来ない物。

第一位王位継承者だったサンドラは、すでに父王から伝承を聞いた後。

本来なら、そんな立場の者を国外に出すはずはなかったが、サンドラの父はサンドラが安易に口にしないとよく理解していた。

サンドラとて、簡単に語ってはいけないと十分理解している。

「姫様。この国の将来を気にするより、今は姫様自身とエルドラーデルの今後を心配すべきでしょう」

真剣な顔つきのサリーを前にして、「そうね」と頷いた。

半年前から国王の寵愛は、《眷属》だろう娘一人に集中している。

新たな正妃となる娘の存在と、その娘だけが国王に愛されている様に後宮が閉じられるのでは、と。

愛妾と呼ばれる《華々》は憂い、日々戦々恐々としている。

確かにそうなる可能性は高い。

政治的思惑など、様々な利害関係が絡み複雑な人間関係を作り上げている後宮を安易に早々と閉じはしないだろうが、《眷属》の存在が周辺諸国に与える影響はあまりにも大き過ぎるのだ。

「いざとなれば、直接陛下に交渉するわ。幾ら何でもここで私たち《華》を後宮から抜き去ってしまうには、各国の《眷属》に対する暗躍が酷くなるばかりよ。私たちがここにいるのは、正式な契約と調印を経ているのですもの。穏便に後宮を閉じるには、時間が掛かるわ」

後宮閉鎖は水と緑を求める他国にしてみれば、その為に自国から厳選した女性をこの後宮に送った意味がなくなってしまう。いっそ、《眷属》そのものを手に入れようと、下手をすれば大規模な戦争すら起こりかねない。

流石に、一国の王ともなるグレンダートという男がその事を読めないはずはないと思うが、『恋は盲目』という言葉がある程だ。

古今東西、それが原因で国が荒れた歴史は大陸中数多にある。

（本当、難儀だわ……）

もしもの時を想定して直接交渉を思案するが、《眷属》を溺愛する今のグレンダートが耳を傾ける確率はあまりにも低い。

まさしく、先程サリーが口にしたように眷属一色の王宮の雰囲気は身動きし辛くて息苦しささえ覚えさせられる。

ふと嘆息した時、部屋の扉がノックされた。
来訪者に対応する為離れたサリーがすぐさま戻って来る。
「姫様、眷属様がいらっしゃっています」
「……そう、お入れして頂戴」
そうして、扉の向こうから現れた一人の娘に対してサンドラは立ち上がり「ようこそ、いらっしゃいました」と優雅な所作で頭を下げる。
「もう、サンドラさんたら、そんな他人行儀な真似はやめてっていつも言っているのに。ねぇ、頭を上げてよ」
拗ねた口調に従って頭を上げたサンドラは、両目を眇めた。
数人の侍女を背後に《眷属》だろう娘は言った。
「暇だったの。一緒にお茶していい？」
「ええ、喜んで」
サンドラが、どれ程この娘に思う事があっても安易に口にも態度にも出せない。
己の肩には、故国・エルドラーデルの全ての民の命と未来が掛かっているのだから。
だからこそ、完璧な笑顔を浮かべ、娘を歓待してみせる。
耳元でまた、風の精霊たちが何事かざわめいた気配がした。

5　愛妾・サンドラ（後書き）

※魔道使（まどうし）→自身の中にある目に見えない《力》を引き出して、自在に操る者。
※精霊使（せいれいし）→精霊と契約して主従関係を結んだり、精霊の好意で貸して貰える《力》を使う者。
どちらも、もともとそう多くはなかったが、水蛇狩り以降生まれ辛くなり、公式に存在を確認されたのは３０年前が最後。
時折、精霊の気配を感じ取れる者が生まれるが、意思疎通は出来ない。

6　隊長・レバンチェック

綺麗なモノと考えていた。
もしくは、可愛らしいモノを想像していた。

国王と同様の、一国の《顔》となるのだ。
数多の民の頂点たる王の隣に立ち、次なる国王となる子の母として、この国の民たちの母として。
《国母》と呼ばれ慕われ敬われるに相応しい『モノ』を思い描(えが)いていた。

しかし、その期待は無慈悲に砕かれた。

……あれは、何だ？
何故、笑顔ひとつ浮かべぬ仮面のような無表情の少女が。
何故、凡庸としか言えぬ顔(かんばせ)の、その身に纏う空気さえ他人(ひと)一人引きつけぬ月並みなのか。

こんな《モノ》は認めない。

五年前に国王となった主君の前に現れた幼子の、他人より際立ったところひとつ見付けられぬその容姿に、落胆は怒りに変わった。

あんなモノが、大切な主君の正式な伴侶になるなど。

グレンダートの傍に控えながら、己の主君であるグレンダートの真向かいに立つ子供をいっそ切り捨ててしまいたい凶暴な衝動が湧く。

このような《モノ》が、自らの命と忠誠を捧げた国王・グレンダートの正妃になる事が決定している現実に唾棄してしまいたい。

外見に夢見過ぎていた事も、期待し過ぎていた事も、所詮は身勝手な願望のみでしかないと理性では解っている。

けれど、その子供の表情のなさは、感情を持たぬただの人形にしか見えず。

まして、それの父親が誰かと考えれば瞬時に嫌悪が生まれ、しかしそれを面に出すようなマネはしないまま、ただその《モノ》をいっそ憎んでいるかのような心中で凝視した。

ああ、こんな傀儡のような子供が、正妃となるのか。

こんな傀儡に、グレンダートへ忠誠を誓ったように、忠誠を誓い捧げるようにならなければならないのか。

認めない。

こんな《傀儡の娘》を。

一体、誰が認めるというのだ。
夫という名の伴侶であるはずの国王本人ですら認めない正妃など。

後宮と王宮を繋ぐ回廊は全部で二つ。
その中でも、国王が居を構える《白銀宮》と繋がる第三回廊を眺める事の出来る一角で、レバンチェックは人を待っていた。

本来、王宮と後宮を繋ぐ回廊など容易に眺められるものではないが、生粋の王族たちの警護を主(しゅ)とした精鋭揃いの親衛隊に属している者たちは、後宮を除けばこの王城内で出入りが極端に制限されている場所はない。
王族の誰に付く事になるかで、各場所への出入り制限が決定され、国王や正妃の寝室へさえ、緊急事態には入室する事が許されている。

男子禁制の後宮も国王本人の許可さえあれば結局のところ出入り可能なのだ。
そして、後宮の中で唯一例外中の例外が、正妃とその正妃が生ん

だ子供たちの居住区となる《暁宮(あかつきのみや)》だ。

精鋭揃いの親衛隊員に、女性騎士は僅かに三人。

その三人全てが現在、太王太后陛下付きとなっており、またいつの時代にも女性騎士がいるとは限らない事から、《暁宮》にのみ正妃とその子たちである王族付きの者達が警護の為に出入りを許される。

そんな理由から《暁宮》は後宮内にあって独立した居住区として扱われた為に、《暁の間》と呼ばれた正妃の居室はいつの頃からか《暁宮》と名を変えていた。

親衛隊の者たちが出入りするのを除けば、他の規則や禁止事項は後宮本来のものとまったく変わらない。

そして王族を守護する親衛隊の中でも、隊長という肩書きを持つレバンチェックは血統貴族第二位のメリレンチェ公爵を父に持つ生粋の貴族であり、一度(ひとたび)戦や内乱でも起これば一軍を率いる三大将軍の一人でもある。

出自に関係なく精鋭揃いで構成される王城の守護警備兵たる近衛師団の中で、卓越した実力者の貴族出身者で占められるのが王族警護をするのが親衛隊だった。

王族の傍仕えでもある以上、他国の要人たちとも接する機会は当然多い。

その為、親衛隊の騎士となった者達は幼い頃から礼法を身につけた貴族の出身者に限られている。

貴族であり礼法を身につけているのならば、剣の腕は実力主義である為、親衛隊となるのに例え下位の貴族であろうが没落寸前であろうが問題ではない。

むしろ、そのような貴族であればある程御家復興の為とばかりに剣の腕に磨きを掛け、優雅な礼法を徹底的に身につける。
そんな人間は、下手な貴族たちを親衛隊とするよりも、純粋な精鋭となるのからだ。

不意にレバンチェックは己の視界に入ったモノに声を掛けていた。

「ラグ」

振り返った人物が、その柔和な顔立ちを更に綻ばせた柔らかさでこちらに小走りに遣って来る。

「隊長。今日は非番ではなかったのですか？」
「そんなものは返上だ。今は王宮だけでなく後宮すら少々騒がしいからな」
「ああ、確かに騒がしいですよね」

緊張を伴う浮き足立った騒がしさは、どうにも隠しようがなく、王城全体に広がっている。
血統貴族筆頭という、現王朝が開かれてから数百年。
現王家と同じく国で一番古き歴史と血を連綿と続けていたセイィータ公爵家の、その当主の突然の死。

すでに逝去した昨日の内に、その訃報は国内外へ報された。
王宮内では、筆頭貴族の死を悼んではいるが、それは形ばかりの空気であって、本来形式に則(のっと)った喪に服す儀礼などは一切執り行われない。

そんなところに、国王派のセイィータ公爵家に対する確執が窺え

る。

「それよりも、ここで会ったのは好都合だ。ラグ、現在のお前の任を解く。暫くは太王太后陛下付きとする。詳しい話は、レオンに訊け」

レバンチェックは当然のように言った。

だが、言われた当人の顔が一瞬その柔和さの中に鋭利を浮かべたが、頭に思い描く《理想の国王夫婦》という像に意識を取られていたレバンチェックは気付かないまま、目の前の青年を見遣る。

ラグアル＝セッシャは、騎士の中の騎士として全騎士と全兵士たちの頂点に立つレバンチェックも認める剣の腕の持ち主だ。

子爵家の三男ではあるが、没落貴族でもある。

下手に貴族の称号を持つが故に、通常の民たちとは違う底辺にいた青年はだからこそか。

その剣の腕のみで騎士たちの憧れである少数精鋭の親衛隊員となった。

そんなラグという愛称で呼ばれる青年に、レバンチェックは憐憫の眼差しを向けた。

親衛隊が守護する王族は現在、僅かに三人。

現国王のグレンダートとその祖母である太王太后陛下。

そして、正妃・アリア。

本来、最低でも五人の親衛隊員が正妃を常に守護すべきだが、専属としてラグのみが正妃付きとなっていた。

親衛隊員の中で、もっとも入隊時期が遅かったというのが正妃付

きに選ばれた理由である。

そのラグが専属に決まったのは四年前。

五年前にアリアが正妃になると同時にその警護を命じられていた五人の隊員は国王の正妃に対する冷遇を見て、警護の任をすでに辞していた。

レバンチェックは常々、この柔和な顔立ちの、けれど剣の腕が六十人いる親衛隊員の中でも十の指に入る実力者であるラグが正妃専属である事を惜しんでいた。

しかし、正妃付きを志願する者はいない。

上からの命令とあれば、誰もが従うだろうが、結局正妃・アリアを真剣に命を掛けて守ろうと思う程には誰一人として忠誠など捧げはしないのだ。

今まで言いたかった命令を漸く下せた事にレバンチェックは安堵した。

（あんな女の下になど宝の持ち腐れだ）

ラグの実力を評価し、それと共に己の大切な親衛隊員がたった一人といえども正妃の傍にいる事が、そしてその正妃を守護する事が心の奥底から許せなかった。

国王・グレンダートの乳兄弟として育った時からレバンチェックにとって、己の命と忠誠はグレンダートのものであり、グレンダートの為ならばこの手を幾らでも汚す事を躊躇わない。

全てを捧げる主君の最も目障りな人間。

先代国王を傀儡のように裏で操っていたと言われるセイィータ公爵。
そして、その娘である正妃となった女。
どちらもが厭わしい。
「隊長。それは陛下の意思でもあるのですか？」
「そうだ」
何故、問うのか。
それがレバンチェックには純粋に解らない。
そんなこちらにラグが眉尻を下げた。
「アリア様の警護は今後、どうなるのですか？」
「何だ。お前が気に掛ける程でもないだろう。近日中に知らされる事だが、今の正妃は廃位が決まっている。次の正妃が誰か、聞かずともお前とて解っているだろう」
「……」
それに言葉も首肯もなかったが、無言を同意とレバンチェックは受け取った。
実際のところ、現在正妃という地位にいる女を真実《国王の妃（はんりょ）》と認めている人間は殆どいないのだ。
今、この国にいる《眷属》
グレンダートがこよなく溺愛している娘は、その容姿や性格をみても十分に国王の隣に堂々と立つのに相応しい娘なのだ。

水と緑を齎す《眷属》。
その娘が現れてから、如実にこの国の緑は増えている。

レバンチェックは、グレンダートに紹介された娘を思い出し、知らず笑みを浮かべていた。
グレンダートに寵愛されるに相応しい娘を、レバンチェックもまた慈しみたいと素直に思う。

「……それが、――――――――」

《眷属》の娘をふと思い出していたレバンチェックの耳にラグの呟きが届く。
けれど、はっきりと聞き取れなかったレバンチェックは「ラグ？」と名前を呼んだが、相手はにっこりと笑顔を向けている。

レバンチェックは違和感を覚えた。
けれど、それが何に対しての違和感なのか当然のように解らない。

解らないからこそ何かを問い掛けようとした時、青年の目がこちらの肩越しに背後を見た。
だから、反射的にレバンチェックも背後を見る為に振り返った。

そこに待ち合わせていた父の姿を認める。

「それでは、オレはここで」
「ラグ…ッ」

現れた父に意識を奪われた僅かの間。断りひとつで青年が踵を返す。

名前を呼んだが、明確な理由があって呼んだ訳ではない。
立ち去っていく部下の背中に、胃の腑の底が嫌にひやりとする。
「レバン、待たせたか？」
「……いえ」
己をひやりとさせたのが何か。
意識を結局切り替えて、レバンチェックは父親を見た。
父であり現メリレンチェ公爵・イヴァンレーンは歩みを止めず、レバンチェックを促し連れ立って目的地へ進む。
第三回廊を横目に、国王の居室がある《白銀宮》の厳重な警備の中、迷いない決然とした足取りで歩いた。
徐々に、国王の居室が近付く。
王族の親衛隊隊長であるレバンチェックは、当然国王・グレンダート付きである。
グレンダートの予定は全て把握していて、今時分居室にいるのを知っている。
「レバン。お前の考えは変わらないな？」
目的地に近付いている最中、不意のようにして父親が問うて来た。
確認の疑問に（今更……）と、レバンチェックは怪訝に眉ねを寄せる。
「現正妃の廃位は決定。それと同時に《眷属》を新たな正妃に。それに反対する理由など誰にもないでしょう？親父殿とて、頼まれていた後見人を辞退するのでしょうが」

自然と咎める口調になった。
父親が、そんなレバンチェックへ感情の窺えない視線を向けて来るのに、ここでもラグアルという青年に覚えたのと同じ胃の臓の底に冷たさを覚えた。
何かを掛け違えているのか？――――無意識にそう己に内心で問うた。
「レバン。私は後見人にはならんよ。例え何があろうとな」
レバンチェックにとっては疎ましい限りのセイィータ公爵と、この隣を歩く父は懇意にしていたのを知っている。
だがそれも結局は、血統貴族の中でも筆頭と第二位という上位故の柵を持つ貴族の付き合いだとレバンチェックは思っていた。
事実、この父は今まさにセイィータ公爵の頼みを一度は聞き入れながら、その死と共に反故にしてしまうのだ。
レバンチェック自身が、身寄りのない《眷属》の後見人になると告げた時、父であるメリレンチェ公爵は反対ひとつせず、ただ一度頷いた。
だからこそ、セイィータ公爵の娘である正妃・アリアの後見人にならないよう言えば、「なるつもりはない」と即答された。
その間のない返事に、セイィータ公爵との付き合いは本当に親しい者としての付き合いではないと改めて感じたのだ。

「親父殿とて、国王陛下に真実相応しいのは《眷属》であるミオしかいないと解っているはずだ。まして、グレンダートとミオは相思相愛。これ以上の理想的な正妃はいない」

それは、一種妄信めいた断言となり、そしてその力強い断言に隠れた危険性を解っていない。

物心つく頃からレバンチェックにとって、グレンダートという人間が全てなのだ。

故にレバンチェックは、己の中に《理想》を描き。
その《理想》を《現実》とする術を模索し。
そうして、《完璧》を求めた。

レバンチェックの《理想》という《完璧》な現実世界に、今の正妃は相応しくない。

初めて見た正妃の幼き日の顔が不意に脳裏にと甦り、激しい拒絶と嫌悪が湧く。

「……あんな《モノ》絶対に認めない」

目の前に全てを捧げた国王・グレンダートの居室の扉があった。

扉を軽く叩く父親の姿を横目に見て、レバンチェックは唇を歪めた。

今からメリレンチェ公爵は、現正妃の後見人にはならない事を告げ、その息子である自分は新たなる正妃の後見人となる事を国王へと告げる。

メリレンチェ公爵家は血統貴族筆頭となるだろう。

没落していくセイィータ公爵に救いの手は何処からも差し伸べられない。

それに愉悦を覚えながら、レバンチェックは開いた扉の向こうを見遣る。

そこにいるのは、レバンチェックにとってたった一人の大切な主君。

（グレンダート……。お前の為なら俺は何だってしてやる）

7　家令・カレヴァ（前書き）

作中、差別ともとられる表現があります。
決して、それらを差別している訳ではありません。
お読みになる方はご注意下さい。また、お読みになる事でもし不快な思いをさせてしまったら申し訳ありません。

7　家令・カレヴァ

その嬰児(みどりこ)を四番目に抱き上げる栄誉を与えられた時の幸福感は、言葉に出来ない程でした。

出産を取り仕切る産婆を除けば、母親父親祖父にと抱き締められ、生まれて来た祝福の空気に包まれ、そして嬰児の出産直後の奥方の世話をする侍女たちの誰かが祝詞と共に抱き上げるのだ。

しかし、当主も奥方も然もそれが当然であるかのように、恐れ多くも室内に呼び入れて頂いた私の腕に自然な動作で嬰児(みどりこ)を私に渡された。

小さくてまろく、柔らかい新たな命の温もりが、その思う以上に小さな口をむにゃむにゃと動かし、柔(やわ)くも鮮やかな息吹が感じられる小さな小さな、本当に小さな舌が覗いて見えた。

女の子なのよ――――産後の疲れを滲ませた渇く声音で、けれど微笑み滲む奥方の言葉が耳に入り込む。

ああ、なんと可愛らしい。

胸に湧き上がる素直な思い。

この掌ひとつで、ほんの少しの力で死んでしまうだろう弱さのその嬰児は、けれどこの全身全霊を掛けてお守りすべき方。

お前の言葉で祝福をくれないか――――――嬰児を見詰めていた私に掛けられた。

はっとした顔を上げると、先代様であるウィリアス様がにやにやと面白そうに私を見ている。寝台に横たわる奥方とその傍で奥方を労っていた旦那様はこちらを優しい眼差しで見ていた。

もう、遠い昔の記憶が甦り、私は腕の中の嬰児を見遣った。

今、この場にある幸福の縮図。

その中に、何の忌憚なく呼び入れて貰えた幸運。

そんな私の気持ちに反応したように、嬰児の唇が「あふり」と息吹くようにして小さく動く。

じっとこちらを見詰めて来る瞳に、容姿の持つ良し悪しは関係なく、内側から光り輝く程に愛らしく、そして賢く育つだろうと容易に想像出来た。

その様を、私は出来るだけ近くで、出来るだけ長く見ていきたいと強く思った。

私の中に流れる血が、ウィリアス様が求める意味を理解したような気がする。

この嬰児（みどりこ）には《祝福》が相応しい。

《幸運》と《光》と――――――――――――――――。

《アリセレシア・リアセレル・アリューセア》
最上級の《祝詞》を私は贈った。
きょとりとした眼差しで、私を見ている嬰児。

世界中の《幸福》を貴方に。
世界中の《光》を貴方に。
世界中の《幸運》を貴方に。

お嬢様、お嬢様。
どうか、幸せになって下さい。
貴方を愛している人たちの祈りは必ず叶うと。
だから、どうか。

そう、貴方の笑顔にどうしてか、私は今は亡き主(あるじ)を思い出してしまうのです。
その笑顔を再び取り戻せるのならば、私は何でも致しましょう。

思い出は、有り余る程にある。
そう思いながら、カレヴァは自室の片付けをしていた。
そうは言っても、大した物などそんなにはなく、片付ける時間は

一刻と掛からない。
物に執着する性質(たち)ではなかったからだ。
けれど、先代や主一家から贈られた品々だけは、手離すつもりはなかった。

そのどれもが、小さくて嵩張らない物という、どうにもこちらの性格をきちんと読んだ上で、しかもそこそこに質は良いけれど、持つ事や使用する事を躊躇うような高価さには至らないという、非常に長持ちする仕事の小道具ばかりで、更に実用性が高い。
抽斗(ひきだし)ひとつ分はあるそれらを、ひとつひとつ机の上に並べながらカレヴァは、それらに纏わる思い出に浸っていた。

そんな大切な品々の上に影がふと差して、顔を上げた。
気配なく神出鬼没である美貌の持ち主が、面白そうな顔付きでしげしげと机の上に整然と並べられた品々を眺めている。

「これは、ツェリ様」
「ウィリアスたちからの贈り物か」
疑問ではない言葉に、柔(やわ)りと微笑んで「はい」と頷いた。
「あいつらは、本当に良い趣味をしている」
眺めやり、感嘆めいた言葉が自然と吐かれるとカレヴァは誇らしげに「そうでございましょう」と内心で首肯する。
審美眼に優れている相手は、《モノ》が持つ美しさだけでなく、《モノ》の本質全てを見極め見通す《眼》を持ち合わせている。

そんな男の素直な褒め言葉には、堂々と誇って良いのだとカレヴァに教えたのは先代のセイィータ公爵・ウィリアスだ。

すでに亡くなって久しいが、未だ鮮明にカレヴァはウィリアスの事を思い出せる。

ひとつ取り上げて、しげしげと見遣りながらツェリと呼ばれた男は言った。

「片付けは、これで終わりか？」

「はい、そうですね。屋敷全体の片付けはとうに終わっております。弔問に訪れた方々も、こちらの手を離れていかれる方々もとくに気付いてはおりません」

「愚か者は、洞察力をやはり持ち合わせていないか」

「旦那様が、取り立てて育てた方々の幾人かも残念な事でございますが」

「人間誰しもが善に塗(まみ)れた聖人でも、正しい選択をする事に長けた世捨て人たる賢者でもない。《欲》を優先させ、その我欲に従うのもまた道理。何も知らぬ生まれたばかりの純粋無垢な赤子時分のままでいられる性根の者などいやしない。いるとするならば、《神の還し子》のみだ」

《神の還し子》は、生まれつきの者もいれば成長する過程で某かの理由や原因により、知識や常識を理解する能力やそれを覚える事が出来ないまま、もしくはその能力が低いままで成長した者たちの事だ。

他人(ひと)を疑う事も知らず、他人(ひと)を騙す術(すべ)も解らない者。

神がこの世界に送り出したもののやはり手離し難いと感じたが為

に《穢れ》を遠ざけられ、どうか世を去り神の御許に還される時は純粋無垢なままに、と望まれた者たち。

故に、《神の還し子》と呼ばれている。

確かに、そのような者ならば、純粋無垢に真っ直ぐに育つだろう。誰かを憎む事も、何かの欲に囚われて穢れる事も知らないまま、また解らないまま。

そのような者以外で、程度の差はあれど、穢れた《欲》を持たない人間などいないのだ。

「アルフォンソへの恩義に手の平を返した者たちも選択を誤ったものだ。恩義に忠実であれば、平穏無事な寿命を迎えられただろうに」

うっそりと嗤う様は、その美貌と相俟って底知れぬ恐ろしさがある。

生き物の本能として、怖気を覚えたカレヴァは、けれどツェリ自身から後ずさるなどという無意識の反応はしなかった。

先代当主・ウィリアスから紹介されて数年は心も体も恐怖を感じた本能が、この男から「逃げろ」と警告を発していたが、この男が本気にならずとも、この男から逃げ切れるはずもなく、またこの男の気を害するような愚かな真似をしない限りは安全なのだ。

ツェリの言葉から、カレヴァは知る。

アルフォンソに取り立てられた事で日の目を見れるようになりながら、セイィータ公爵家を見捨て見限ったという、そんな理由でこれからの人生はこれまで以上の苦難と苦痛に塗(まみ)れたものになるだろ

う。
その中には保身に走っただけの者もいるだろう。
しかし、それがツェリの中で免罪符として値しない理由と選別されている以上、やはりその人生に平穏は殆どと言っていい程に訪れない。

そうしてしまえるツェリという存在を空恐ろしいと思うものの、またカレヴァはその者たちを助けたいと思う憐憫の情も、見限る良心の痛みも覚えない。

カレヴァにとってセイィータ公爵家の者たちが最優先であり、その公爵家の為だけに幾らでも非情になれる。

齢八十半ばとなり、皺くちゃの手でそっと机上の品々を撫でた。

長く生きて来たが、そろそろ己もウィリアス(あるじ)の御許(みもと)へ逝けるだろう。

遅くとも数年と掛からないはずだ。

苦難に塗れ、地獄のような日々から救いあげてくれたウィリアスへの忠誠心と忠義心は並々ならぬ程に篤(あつ)い。

「そういえば、アルフォンソが礼を言っていたぞ。お前の《祝詞》のお陰で、酷い様(さま)にはならなかったと」
「恐れ多いことでございます」
「謙遜する事はあるまい。《レルヴィルタの神官》直々の《祝詞》だ。それを含んだ《名》を持つ事で大きな災厄はあの娘を傷つける事はなかったのだから」
「《レルヴィルタの神官》とは言っても、私は神官となる前に戦災奴隷となった身でございます。拝命式を受ける前でしたので、正式

な《レルヴィルタの神官》ではございませんし、また血統的には傍流の更に末端でしたので、大した《力》もございません」
「だが、お前の持つ《血》は確かにあの娘を《守護》した。《レルヴィルタの神官》は本流の更に濃い血を持っていたとしても《言霊》へ誠実な祈りや嘘偽りない献身さがなければ、作用する《力》は弱い。いっそ、あの国が今もあるならばお前は大神官に必ずなれただろう」
「それもまた恐れ多い事。私は、ただ願い祈っただけでございます。お嬢様にどうか末永く多くの幸あらん事を。……ですが、正妃となられたお嬢様は幸せではありませんでした。私の《力》が弱過ぎたのです」
「それでも、あの娘に降り掛かっただろう様々な害意から守り切ったのは、お前の《祝詞》あっての事だ」
「お嬢様のお傍に、常にヴィ様がいらしたからでございます」
「ヴィが、あの娘の傍にいる前はどうだ？俺は、三年程前まであの娘の現状を知らなかった。知っていれば、ウィリアスの孫でアルフォンソの娘だ。助けてやっただろうが、現実は違っただろう？」
「……」
「後宮に入ったあの娘を助け続けるには、アルフォンソにもルフォードにも限界がある。後宮は女どもの欲望渦巻く魔窟だ。容易に手出し出来ない危険な場所で、お前によって贈られた《名》は得難いものだ。……本当に惜しいものだと思うがな。お前が《レルヴィルタの神官》の大神官になれなかった事が」
「ツェリ様にそう仰って頂き、大変名誉な事ではございますが、それはどうあっても有り得ない事。ツェリ様が、お嬢様の現状を知らなかったという現実と同じでございます。《レルヴィルタの神官》というものが何であるか、どのようなものであったか、国が滅ばされたと共に殆ど失われてしまったのです。その血統も神官としての仕来りも。私が知っている事など大したものではございません。ただの見習いのままでした」

国はとうの昔に戦争に負けて滅んだ。
水場を巡った戦争は、軍事力の乏しい小国をあっという間に大陸上から消し去った。

十になる前に、戦災奴隷となったカレヴァは戦勝国となった国の娼館で汚れ仕事を手伝わされていた。大の大人でも根を上げる力仕事を満足な食事も睡眠も与えられないままに強いられた。

罵声も暴力も大量に浴びせられたが、幸いだったのは娼館で働いてはいたものの男娼としての仕事を強いられなかった事だろう。

見目良くもなかったし、奴隷としての扱いは体を枯れ木のようにしてしまっていたから、余程の好事家か人に言えぬ趣味の持ち主であれば手を出されていたかもしれない。

敗戦国となった国の民で、更に奴隷となった者はその大半は死ぬまで奴隷のままだ。
奴隷制度を廃止している国は当時、多くはなかったし、大量に溢れる難民や戦災孤児を上手く使う術（すべ）として奴隷制度を推奨している国もあった。

《レルヴィルタの神官》は精霊の声を聞く者として有名であったし、神官となる者の多くはかつての祖に精霊がいると言われる者たちだった。

その中で大神官ともなれば、精霊と契約したり、精霊の好意で《力》を貸して貰える精霊使（せいれいし）にもなれる者だ。

元々《神官》になれるのは、その血に《力》を持つ者だから、《

レルヴィルタの神官》と呼ばれる者たち直々に《祝詞》を貰えたならば、それはとても慶ばれたものであったし、その神官から《祝詞》を頂こうと遠くの国から態々足を運ぶ者も多くいた程だ。

《力》ある神官からの祝福は、様々な災厄を遠ざける目に見えない《お守り》となる。

それ程に《レルヴィルタの神官》から直々の《祝詞》は尊ばれていた。

「見習いのままで、あの魔窟で娘を守り通したその事がお前の《力》の強さだ。《アリセレシア・リアセレル・アリューセア》という《祝詞》に込められた祈りと願いによって、ウィリアスとアルフォンソがつけたのが《アリア》という名前。お前の《言霊》が常にあの娘を守った。それを誇りに思うのは悪い事でない。それでも、恐れ多いと謙遜するか？俺やヴィでさえ褒めたる事実を」

「ツェリ様は、褒め上手でございますね。そこまで言われては、謙遜する事など出来ません。貴方様方の褒め言葉、有り難く頂戴したくございます」

深々と頭を下げるセイィータ公爵家の家令にツェリは、満足そうに頷いた。

「さて、この屋敷を出て行く者たちの行く先はどうなっている？」

問いにカレヴァは面を上げた。

公爵家を見限り見捨てる者たちの事ではない。

恩義を感じ、それに感謝し、そして恩を返そうとしていた者たち。

そして、陰日なたとなってセイィータ公爵にずっと協力していた者たちや懇意にしていた者たち。

他意なく仕えて来た者たち。

所縁(ゆかり)あるそれらの人々の行く末への問い掛けに、カレヴァは淀みなく答える。

「国を離れられない者たちは、西方街首(がいしゅ)・サムラケベケスにある公爵家所有の土地へ移住となります。あちらの土地は広大ですし、多少移住者が増えたからと困る事はございません。また、公爵家の所縁ある土地と知るのは口の堅い者たちのみ。国を出る者たちにも、南方にある古国・エルドラーデルを目指すよう指示しました。あの国には《眷属》に纏わる伝承が略歪(ほぼ)みなく伝わり残っていると貴方様からお聞きしましたので、出て行く者たちを率いるダジーダ子爵にエルドラーデル国王への旦那様の親書と共にセイィータ公爵家所縁の者である証の品を持たせました。決して、あの国は悪い扱いはしないでしょう。また、道中不安があるでしょうから、僭越ながら私から皆一人一人に無事を祈る《言霊》を一言ながらも掛けさせて頂きました」

「出立時刻は？」

「今宵、王宮での宴の開かれる頃に合わせてそれぞれ行動するよう若様から直接、皆指示されております。警護も兼ねられる方々もおりますし、王都や国へ出入りする身分証にも一切の不備はございません。地方に家族を持つ者たちも、アルフォンソ様がご存命の折より動いておりましたので、特に不審を覚えた者もおりません」

アルフォンソが急逝する前から、すでにこの地を離れる手筈は整い、不審を招かないよう少しずつそれぞれが行動していた。

残っていたのは、この屋敷に仕える者たちやどうしてもすぐには離れる事の出来ない者たち。

それらの人々も今宵を境にして、全てがいなくなる。

そして、この屋敷を最後に出て行くのは次期公爵となるはずだったルフォードではなく。

この屋敷の一切を任されていた家令のカレヴァだ。

「明日…、いや宴で喜劇の幕が下りれば早々にこの屋敷を囲い込む兵士たちが送り込まれて来るだろう。だが、その時にはもぬけの空。それを見た者たちの晒す間抜け面は、かなり嗤えるだろうな」

「そうでございますね」

「だが、この屋敷を荒らされるのは我慢ならん。この庭もだ。ウィリアスが愛し、アルフォンソたちが愛でた思い出の場所だ。ウィリアスにしろルフォードにしろ執着はしていないらしいが、だからといって手垢をつけられるのは忌々しい」

「ヴィ様と同じ事を仰られる」

好々爺とした面(おもて)に微笑ましげな苦笑をカレヴァは浮かべた。

ツェリの物言いに、やはりこの男と同じように素晴らしい美貌の持ち主であるヴィという男が、屋敷内を一回りして似たような事を口にしていた。

「あの娘の思い出溢れる場所だからな。……ああ、そうだ。今宵喜劇の付き添(エスコート)いを嬉々として務めるヴィの姿が眼に浮かぶ」

「お嬢様のお傍に、あの方がいらっしゃるなら何も心配する事はございませんね。勿論、ツェリ様は若様のエスコートを務め最初から最後まで観劇なさるのでございましょう」

「勿論。たっぷり嗤える喜劇はそうそう多くはないからな。随分前から楽しみで仕方ない。それも、あの愚王にとって《眷属》の娘のお披露目とその娘の懐妊の祝いを兼ねた祝宴だと言うから、すでに

腹が捩れそうだ。正妃の廃位の宣言もするだろうし……ああ、本当に愚かしいなぁ、あの王は」

しみじみと呟くツェリにカレヴァも「本当に、そうでございますね」と正直な思いで同意する。

真実を見抜けとまでは望まない。

だが、真実を見分ける眼を持とうとする努力はすべきだったのだ。

グレンダートという王は――――――。

しかし、それは全て『今更』というもの。

カレヴァは、机上のひとつひとつを涸れて皺寄るその手の指先でそっと撫でた。

思い出は持って行こう。

この品々は大切に、墓の中まで持参しよう。

ふと、瞼の裏に甦るのは、こちらに向かって掌を差し伸べ笑っているウィリアス。

ろくでもない生活の中で、死に掛けた体で、それでも生きたいと望み、こちらに伸ばされた手を取った日からカレヴァにとって、ウィリアスに連なる公爵家の人々は大切で仕方ない。

先代・ウィリアスは二十年前に逝き、当代・アルフォンソは先日逝った。

次代は、ツェリという男が連れて行く。

そして、お嬢様は――――――――……。

カレヴァは、そっと皺くちゃな面に泣き笑いを浮かべて、知らず呟く。

どうか、若様とお嬢様に幸あらん事を――――――――――――。

7　家令・カレヴァ（後書き）

街主《がいしゅ》→街の中心地であり街長が住まう場所。

8　侍女・ニコラ

正直に言ってしまっても宜しいのでしょうか。
いいえ、問うても意味のない事です。

何故なら、私にとってはどうでもよい事なのです。

私は私の仕事をするだけの事。

何しろ、私が仕えるべき主人だと女官長に言われたお相手は、私たち傍仕えとなる女官・侍女誰一人に対して何一つとして興味を示されなかったのですから。

噂だけならば、可愛く綺麗な小鳥達のたっぷりと毒を孕んだ囀りで聞いてはいました。

生気（かんじょう）のない《人形姫》。

まったく誰が言い始めたのかは興味はありませんが、確かに的を射た言葉は、たったそれだけで王妃様の全てを表していましたから。

親衛隊から配属された王妃様付きの騎士が五人。
侍女もまた五人。
そして、女官は三人。

一国の、それも正妃たる立場の女性に付けられる傍仕えの人間がたったそれだけ。
しかも、ご実家から連れて来られた侍女の一人もいないと知った時、私は正直周囲の方々の正気を疑いました。

幾ら国王様に疎まれていようと、ご実家は王家と比肩する程の歴史と伝統を持つ血統貴族筆頭のセイィータ公爵家。
そのご実家の力を使えば、幾らでもご実家の息の掛かった侍女や騎士を後宮に送り込む事など容易い筈です。
他の幾輪もの《華》など、ご実家から何人も気心の知れた侍女などを連れて来られていますのに。

政(まつりごと)に絡んだ上下の位置づけは、《華々》にも当然ございます。
その背景絡みで、《華》の手持ちとなる許された傍仕えの数もそれぞればらつきがありますが、最低でも一人か二人は「腹心」とも呼べる者を傍らに置くものです。

けれど、王妃様がそれを望まなかったのかそれとも国王様が許さなかったのか。
それらの答えを一介の侍女が軽々しく自ら知ろうとするのは恐れ多い事です。

最低限の人間だけを付けられた王妃様に同情の声をあげる者がいないという現状が、王妃様の立場を物語り、また国王様からどれ程軽んじられて見られているかを周囲にまざまざと印象付けていて、私は何故自分が厄介事の匂いがする《暁宮(みや)》付き侍女に配置されたのか。

溜め息を何度も零したものです。

そんな私は、ただ仕事をしました。
貴族のご実家から行儀見習いとして王宮にあがる女官たちの仕事の大半は、仕える主の話し相手やお茶の相手をするのが主(メイン)で、そのたおやかな手が荒れるような仕事をこなす必要性はなく、私のよう

に裕福な商人や中位以上の官吏の身内として身元を保証されている侍女は室内に入る事を許され、細々とした身の回りの世話などをするのがお仕事です。

だから、私は無駄口ひとつ叩かず、王妃様の過ごされる室内の掃除などをしましたし、手間の掛かるドレスの時は着替えの手伝いをし、複雑な髪結いの役目を任される事もありました。

ただ、誰も王妃様に与えられた《暁宮(あかつきのみや)》で王妃様の傍に長くいようとする者はおりませんでした。

私とて、にこりとも微笑まず、満足な言葉も綴らず、耳にした王妃様の語彙など片手で数えられる程――――などという人間(ひと)の傍に長くいたいものではありませんでしたし、王妃様も誰がいようといまいと気にされている様子は一度としてありませんでした。

こちらが起床を知らせる前には身支度を整え、衣服の着替えも私たちの手を殆ど借りず、湯殿も一人を好み、お茶のひとつとしてこちらが差し出さなければ望みもしない。

手間暇掛からないという事だけが、唯一の美点でした。

そんな《人形姫》は、王妃として公の場に出た際には、笑顔を浮かべ声を出され、手を振り。

例え、それら全てが作り物だとしても《王妃》としての仕事は完璧にこなしておりました。

完璧な《王妃》の欠点は、その容姿が凡庸というだけで、他国から訪れた大使などは、時折《王妃》の仕事ぶりを褒め称えていた事もあったとか。

そんなお姿と普段のお姿の落差に、本気でこの方は誰かに操られる《人形》なのだと、幾度となくしみじみ思ったものです。

けれど、窓辺の向こうを見ていらっしゃる姿がふとした瞬間に随分と小さく見えたのはどうしてでしょう。

寄る辺ない幼子のように、寂しさをそこに感じた気がしました。

正直、何故この方は幸せを知らないのでしょうか。

それとも幸か不幸かも感じる心がやはりないのでしょうか。

いえ、やはり問うても意味のない事。

私は私の仕事をするだけです。

所詮、私は多少裕福な商人の娘に生まれ、花嫁修業の一環として王宮勤めを希望しただけに過ぎず、それがたまたま王妃様付きになった一介の侍女。

一生を捧げる程に決意して、後宮に侍女として勤めている訳ではないのですから。

だから、王妃様。

貴方が幸せであろうとなかろうと私にはどうでもいい事。

ただ、私は貴方という王妃がいたと、その数年間をたまたま近くで見知っていただけの人間。

それだけでさえ《罪》と断言されると解っていたら、私はもう少し貴方をお慰めしようとしたでしょうか。

ニコラは、突然決まった宴の準備に借り出されていた。
普段は、《暁宮(あかつきのみや)》付き唯一の侍女としてそちらに詰め、王宮や後宮内との橋渡し役も勤めていたが、それも実質的にはとうに役目を終えている。

未だ、《暁宮(あかつきのみや)》にはセイィータ公爵家の息女・アリアが正妃として存在しているが、国王陛下が隠す事なく溺愛する娘であり、また《眷属》とも言われている娘の懐妊が二日前王宮内外に報されたのだ。

それに因って、王宮はその祝宴の準備に追われている。
宴の準備期間はあまりにも短いが、とにかく国王は《眷属》の娘の懐妊祝いをしたいようで、祝宴に呼ばれる貴族や国外の要人たちなどは、今すぐにでも王宮に出向く事が出来る者たちだけのようだ。

領地から早々遣って来れない貴族たちや国外の要人たちに関しては、後日盛大な宴を計画しているらしく、今夜の宴は珍しくも小さなものであると聞き知っているニコラであっても、やはり急ごしらえの準備に穴があってはいけないと緊張してしまう。

しかも、《眷属》の姿はあまり知られていないのでお披露目も兼ねているのだから、些細な事にも決して手抜きは出来ない。

猫の手も借りたい忙しさに、後宮勤めの侍女も手が比較的空いている者は宴の準備を優先するよう通達され、ニコラは当然それに従った。

数人の王宮勤めの侍女たちと共に、手配された花々を宴の場へと飾る為に抱えて歩く。

「それにしても、漸くニコラもお役目から解放されるわね」

勤める場は王宮と後宮という違いがあるが、顔見知りの侍女は訳知り顔で言う。

問い掛けというには確信した言葉に、ニコラは「そうね」と頷いた。

「五年も、あの王妃様に仕える事の出来たニコラを尊敬するわ。私、あんな無表情で何考えているか解らない人、何だか怖くてダメだわ」

「ああ、解る解る。だって、結局王妃様付きの侍女で残ったのニコラだけなんでしょ？何人か配置換えで《暁宮（あかつきのみや）》にも付けられたって聞いたけど、長続きしないって有名だったものねぇ」

確かに侍女仲間達の言う通りだ。

「私だって、まさか自分一人だけになるとは思わなかったわよ」

最初の一年で、親衛隊の騎士五人が王妃付きを辞退し、別の親衛隊騎士が一人となった。

それから半年足らずで、元々足の遠ざかっていた女官三人が別の《華》付きを希望していなくなり、五人いた侍女もニコラ以外が数回その顔ぶれを交代し、ここ二年はニコラ一人となっていた。

本来、そんな事は王妃付きとして有るまじき事態なのだが、この国の、それも現国王の今は有りえてしまった。

その冷遇具合に、本来後宮の主人として采配を揮（ふる）うべきはずの正妃が侍女たちにすら格下に見られている。

王妃といえば後宮を纏め上げ采配を揮う素振りさえひとつとして、ニコラは仕えてから五年の間一度として見た事はなかった。

それは後宮の主人となる才覚が元からなかったからか、それともなる気がなかったからか。
どちらにしろ、正妃という位にある者が後宮の格下にあたる女たちを纏め上げていないのは問題だ。

采配者として行動ひとつどころか言動にもちらりと表れない王妃に、結局女官長が積極的に動き回り、尚の事、後宮の主人として周知されていたのは愛妾の一人・ミアリリスである。

尤も、ここ最近は国王の寵愛を独り占めしている《眷属》という《華》が後宮の新たな主人と認知されつつあった。

「後宮付き侍女になるのも、やっぱり主人が誰かで良し悪しが変わるものよね。今までだったら、ミアリリス様の侍女になりたいって子が多かったけれど、今では《眷属》様付きを希望する子が多いものねぇ」
「それはそうよ。陛下のご寵愛っぷりって半端ないって有名だもの。《眷属》様が後宮入りしてから、他の《華》の何方(どなた)のところにも通われてないんでしょう？《眷属》様が正妃になられるのも決定的だって言うし、ご寵愛されている女性の侍女で、しかも正妃様になられるっていう主人に仕えられたら私たち侍女も誇り高くて、更に箔がつくってものだわ」

位の低い主人付きの侍女よりも、当然国王の覚えもめでたい高位の主人の下(もと)で働く侍女の方が、将来的にみて婚姻の際の箔のつき具合が違って来る。
出来るならば国王陛下付きの侍女だったという肩書きが一番だが、新たに正妃となるだろう女性が国王の寵愛を一身に受けていて、更に《眷属》ともなれば、そんな高貴な身分の女性に仕えた事実は、

大層自慢な箔となり、婚姻には色々と有益だ。

ニコラにしてみれば、正妃といえども名前だけのセイィータ公爵家息女に仕えていた五年間は、ある意味無為に過ぎた時間でしかない。

それでも仕事は仕事と割り切って仕えてはいた。

そんな割り切り具合を評価されて、五年間配置換えの話が女官長の口から出なかったという皮肉な事実をニコラは知らない。

「次は、誰に仕える事になるのかしら」

「絶対、良いところよ」

つい零れた言葉に、可笑しそうに返された。

「あの王妃様に五年も仕えて来れた実績買われて高官方の誰かか、もしかしたら眷属様付きって事もありえると思うわ」

「そうよ、ニコラってば有能だって聞くわ。王宮女官長も後宮女官長から聞いたって話をしていたもの」

「眷属様にはすでに何人もの侍女や女官たちが付いているから、流石にそれはないんじゃないかしら」

ニコラは苦笑して否定した。

国王の寵愛深き娘には、国王自らが厳選したと言われる侍女や女官たちが大勢仕えている。

親衛隊の騎士でさえ、十五人も専属で仕えているのだから、そういうところで現正妃との待遇の差があからさまに出ていた。

「噂では、眷属様ってとってもお優しいって聞くし、私たち侍女一

人一人の名前もちゃんと呼んで下さるそうよ。三日に一度は、侍女たちも一緒にお茶会とかしているんですって」
「いいわねぇ。私、前の主(あるじ)が辞官されてから今のところ次の仕え先が決まっていないのよ。何方(どなた)の専属でもないからあちこちから雑用言いつけられて、お茶なんてしている暇ないわよ。侍女って言っても、仕える主が定まってないとただの女使用人ですもの」
「そうよねぇ。出来るなら貴族階級に生まれたかったわ」
「あら、どうして？」
「運が良ければ、私室付女官になれたかもしれないじゃない。眷属様って、身寄りがいらっしゃらないんでしょう？」

姦しい会話にニコラも時折口を挟みながら、（そういえばそうね）と頷く。

私室付女官と呼ばれるのは、王妃と最も親しい女官だ。
けれど、大抵は王妃が最も信頼出来る要素を持つ王妃と縁戚者にあたる者がなる。
後宮の雑用・人事等一切を取り仕切る女官長とは一線を画した権限を持つとも言われている。

侍女仲間の発言が、せめて貴族階級を持ち、女官として仕えられていたならば私室付女官も夢ではないと願望めいてしまうのは、眷属に身寄りがないからだ。

「無理よ。メリレンチェ公爵家が後見人の名乗りをあげたじゃない。陛下もお認めになられたし、私室付女官って名誉を戴くのはメリレンチェ公爵家の縁戚者だわ。しかも、後見人の名乗りを挙げる前に、眷属様付くの女官や侍女の何人かはメリレンチェ公爵家の縁戚者から選ばれていたそうよ」
「それなら、最初から眷属様の後見人はメリレンチェ公爵家って事

ね」

それを聞いてニコラは、今自分が仕えている正妃が廃されるのが以前から決まっていたのだと改めて思い知る。

しかし、それを知ったからと言って痛む心がある訳ではない。

仕事と割り切った上での、正妃と侍女の関係なのだ。

「ねぇ、ニコラ。ちょっと前から訊きたい事あったんだけど」

「何？」

準備に掛けられる時間が短いから急ぎ足ではあるが、宴の場までまだ距離がある。

興味津々とした眼が向けられて、瞬きした。

「ここ二年も《暁宮》の侍女ってあなただけだったでしょう？」

「そうね」

それは誰もが知っていた事だ。

「しかも、専属の騎士様も一人。男と女がずっと一人だけだったのよ。何かロマンスとかは生まれなかったの？」

その問い掛けに、他の侍女たちが「きゃー」と騒いだ。

王城内の廊下を歩いているところなので、流石に声量は抑えられていたがニコラを驚かせるには質問の内容と共に十分だった。

「そうよ、そうよ。私たちも訊きたいわっ」

「しかも、あのラグアル＝セッシャ様でしょうっ。レバンチェック様がその腕を認められているって有名じゃない」

「しかも、ご実家は子爵家とは言っても困窮しているって言うし、三男らしいし、ニコラの実家との釣り合いは十分取れてるじゃない」
「ちょ…っ、馬鹿な事言わないでよっ」

ニコラは、睨みつけるように言うが迫力はない。
自分の耳が熱を持ったのを知っている。

ニコラの実家は、金を持っている商家だ。
正妃付き唯一の騎士の実家が没落貴族であり、跡継ぎではない三男なら、寧ろ男の実家は諸手を挙げてニコラを歓迎するだろう。
それ位には、ニコラの実家は裕福だ。

「私たちより、男性と接する時間は多かったんでしょう？しかも、親衛隊の騎士様ともなればそれだけで引く手数多なのに、相手はセッシャ様よ。柔らかな顔立ちで優しい性格で、とても気さくで、剣の腕は親衛隊の中で十の指に入ってるって。付き合っている女性はいないそうだし、婚約者もいないって聞いた事があるわ」
「セッシャ様、いいわよねぇ。好みだわ。それに頑張れば、私たちでも手が届きそうじゃない」

姦しい会話が更に盛り上がる。
確かに、実家が裕福であれば爵位持ちでなくてもラグアルとの婚姻も夢ではない。
高官の娘であれば、その父親の口利きで、没落している実家の人間を何かの役職に登用するなどという支援が出来る。

しかも、ラグアルの容姿は女性受けする位には整っている。
柔和な容姿は何処か頼りなさ気にも見えるが、性格の良さが滲み出ていて、いっそ甘い面立ちと評されるだろうが、精鋭中の精鋭である親衛隊員として働く姿はその甘さを削ぎ落とすので、落差のあ

る姿がモテる要因にもなっている。

ニコラとて、長く接している内にラグアルを憎からず思っている。

けれど……と。

ニコラは、視線を眇めた。

確かにラグアルは優しい。

しかも、たった一人で正妃に仕える侍女であるニコラを気遣える細やかな気性の持ち主でもある。

それには随分と慰められた。

ただ仕事をすればいいと割り切っていたとしても、一人である事と誰か傍にいて気遣う声を掛けてくれる者がいるのとでは心持ちが大いに違って来るのだから。

「でも、前に噂なかった？」

「え、どんな？」

親衛隊に属する騎士の誰それが好みだ格好好いだ話していた中の一人が、ふと思い出したとばかりに言った。

「ほら、セッシャ様と王妃様の仲が……、ね」

明言は避けて、聞いた人間の想像を掻き立てる物言いにニコラはカチンと来た。

「セッシャ様の誤解を招くような言い方止めなさいよ。下手したらセッシャ様の名誉を貶めるような事にもなりかねないのよ」

「ちょっと。そんな大げさに怒らなくていいじゃない」

「そうよ、ニコラ。大体、噂があったのは本当じゃない」

「一時的なものよ。第一、一番傍にいた私は噂が真実じゃないって知っているのよっ」

自然、ニコラの声音は叱責するようなきつさになった。

言われた侍女たちが、少し白けた感じで肩を竦める。

言い出した侍女にしてみれば、いつもの他愛ない噂話を引き出して来たに過ぎないし、他の侍女たちも真偽はどうあれ噂を囀る楽しさを満喫したいだけなのだ。

以前、余りにも有能なラグアルを正妃付きから外そうとしたらしいが、それをラグアル自身が即答で断ったというそれだけの経緯で正妃の傍を離れられない事情があるのではないかと噂がたった。

そうなると色々脚色という尾ひれ背びれがついて噂は誇大に巡るものだ。

最終的には、正妃と騎士は並々ならぬ関係を持っているとまで噂された。

だが、ある意味それも仕方ないと言えた。

何しろ、ラグアル＝セッシャは正妃の傍近くに常に控えている唯一の異性なのだ。

国王の足も遠く、更には《暁宮》の人員配置を考えると国王以外の異性を引き入れようと思えば出来なくもない。

それ程に、《暁宮》の警備体制は侍女達の目から見ても甘く、唯一の侍女ニコラですら四六時中《暁宮》に詰めている訳ではないので、逆にその内情を良く知るニコラにも《暁宮》は異性を引き入れるのに適していると思えてしまうのだ。

良からぬ事を考える人間が入り込み易いとも言える。

騎士の矜持を軽んじたとも言える噂は、常に娯楽を求めている宮中の人間の好奇心を容易く満たした。そうして、結局のところラグアル＝セッシャの人徳だろうか。噂はそう長引かずに下火になったのだ。

それを蒸し返されてニコラは本気で憤った。

あの優しい騎士様が、何故あのような生きているのか死んでいるのか解らないような人形（せいひ）姫と男女の仲を噂されなければならないのだ。

「何をしているの、あなた達」

下種な勘繰りに、ニコラは何かもっと言おうとしたがそれは突然飛んで来た叱責に出鼻を挫かれた。

ハッとして皆でそちらを振り返ると王宮女官長がいた。

「お喋りが楽しいのは仕方ないけれど、今は囀り合っている場合じゃないでしょう。宴の時刻までに生花を全て飾り終えないといけないのよ。それに仕事はそれだけじゃないでしょう」

さぁ急ぎなさい――――と、語気強く言った女官長が侍女達の行動を急かす様にパンッパンッと掌を打ち合った。

「はいっ！！」と皆で勢い返事して更に先を急ぎ出す。

そんな中、ニコラの胸中はもやもやしたもので一杯になっていた。

憎からず思っている騎士が、正妃と噂になったというそれだけで肌に大量の砂をざらりと擦（こす）り付けられた気分になった。

（いやよ、噂になるだけでも許せないのに……っ）

《暁宮》に長く勤めているニコラは、二人がそんな雰囲気になった事がないと知っている。

正妃・アリアは相変わらず人形のようで不気味であったし、騎士・ラグアルは職務に忠実であった。

ただ、それだけだった。

だから、ニコラは安心して仕事をしていられたのだ。

正妃がどんなに冷遇されようが、どんな悪質な噂の的になろうが関係なかった。

そんな主の侍女ともなれば、後宮内で苛めの対象になりそうだが、逆にそんな主に仕えているからこそニコラは周囲の人間に同情されていた。

淡々と、仕事を忠実にこなす。

侍女としての矜持が、それを蔑ろにするのを許さなかった。

そして、その仕事場には毎日会える人がいたから、だからニコラはただ仕事を真面目にこなしたのだ。

抱えた花々を知らず強く抱き、足早の踵が普段以上に強く廊下の建材を踏みつける。

そして、ニコラは時を置かずに知るのだ。

残酷な現実を。

傍観者であった事さえ、許される謂れにはならないのだと。

9　騎士・レオン

遠目に見たのが最初だった。

東の領地にて、農作物を荒らしていた害獣が人を襲い始めたと知り、またその害獣が本来冬の間は山に篭って滅多に出て来ないという中で真冬にも関わらず出て来た事が大きな問題になった。

下っ端の兵士たちが二十人以上の集団で掛かれば仕留められるはずのものが、そうなると軍が最低でも十人以上出張らなくては仕留めるのに苦労する。

まして、報告では横も縦も大の大人の三倍以上の体格だという。

当時、外軍（がいぐん）の中でも国境に沿って国内巡回が主（おも）となる第三師団の中から精鋭の部下を十数名引き連れて、害獣が暴れている土地へ向かった。

餌が少ない冬季の、更に空腹状態の害獣は厄介だ。

下手をすれば、軍の精鋭であっても重い怪我を負う事がある。

質（たち）の悪い事に、追加報告では雌雄の番だというから、子がいる可能性があり、そうなると益々討伐が難しくなる。

死者が出る覚悟をした。

軍からの人員を増やさなくてはならず、討伐先の土地へ向かう途中にある町に休憩を兼ねて立ち寄った。

そこから伝令鳥を飛ばして、追加人員を準備が出来次第すぐさま出立させるよう命令書を出すつもりだった。

しかし、そこには療養に来ているというセイィータ公爵一家が滞在されていた。
公爵夫人の体が弱い事は有名であったし、立ち寄った町は温泉が幾つかあり療養地として人気があった。
だから、公爵一家が滞在されていたとしても不思議ではなかった。

そして、物々しい雰囲気を醸し出す我々に公爵の方から声を掛けて下さり、更に事情を説明すると護衛として引き連れて来ていたセイィータ公爵家お抱えの領軍(りょうぐん)から人を出してくれるという有り難い申し出があった。

心強い援軍を得て、そうして害獣の討伐はこちら側に大した被害を出さずに完遂出来た。
帰還の途についた時、当然その療養地へ足を運び公爵に面会した。

その時の事だ。

子供特有の甲高く柔らかい笑い声が耳を掠め、振り返れば遠目に見た幼女の姿。
着込んだ衣服の様相から高貴な身分の子であるのは知れたし、自然その幼女がセイィータ公爵家のご息女とすぐに察せられた。

何か楽しい事でもあったのだろう。
傍目にも厳つい強面の男たち数人に囲まれながらも何やら面白そうに笑っている。
男たちも、その面(おもて)から想像も付かない和やかで優しげな空気で幼女を見守って相手をしている。

内幾人かは見知った顔ぶれだった。
公爵が貸し出して下さった領軍の兵士たちだ。

公爵令嬢は、人見知りも恐れもせず無邪気に何やら話し掛け、それに男達が穏やかに笑って対応している。

強面の軍人集団と幼くも高貴な娘という何とも奇妙な組み合わせは、けれど流れる空気の気安さと柔らかさで別段そこまで不思議なものとは感じられなかった。

それだけ、彼らとご息女が常日頃から親しくしているのだと知れる。

貴族の令嬢ともなれば、何とも珍しいはずが、その場にはそんな珍しさはない。

知らずその光景を見遣って暫く。

耳の奥にご息女の何とも無邪気で柔らかな笑い声を残したまま踵を返した。

生まれながらにして国王陛下の許婚。

あのご息女が未来の正妃となられるのも悪くない――――確かにその時、ふとそう思った。

二度目に見た時に、かつて見たはずの無邪気さも楽しさも柔らかさも優しさも、何もかも削ぎ落とした無表情のご息女に激しく心が痛んだ。

一体、何があって、どうしてご息女がこうも変わり果ててしまったのか。

貴族令嬢として完璧な所作で挨拶をして、ひとつ。

ふと伏せられた眼差しは何を見ているというのか。

お労しいと憐憫を向けるのは簡単であった。

しかし、そんなモノをご息女が欲しているかどうか。

ただ、国王陛下の、その周囲の、そうして多くの人々の、正妃であらせられるセイィータ公爵令嬢に向けられる排他的な冷遇ぶりには何度も目を覆いたくなった。

一体、どうしてこれ程までに存在自体を否定されるように見られるのか。

いかようにも遣りようはあったのだ。

どれ程、セイィータ公爵が持つ権力があろうと。

どれ程、先代国王陛下の遺言があろうと。

国王となって長くその地位を維持し、国王派と呼ばれるまでの強固な派閥を作り上げたグレンダート陛下が本気で動かれていれば、セイィータ公爵令嬢との婚姻を、それが成される前に白紙に戻す事が出来たはずなのだ。

背景にある政(まつりごと)の力関係も、セイィータ公爵家の血筋を王家に今入れる事はバランスを崩す事となりかねないと懸念して、国王派でなくても反対する人間は多くいたのだ。

例え、仮にセイィータ公爵が先代陛下の遺言を楯に取り、婚姻の儀を強行したのだとしても。

実際、セイィータ公爵は先代国王の遺言を楯にも取らなかったし、

婚姻の儀を強行した訳でもなかった。
ただ、事前にグレンダート国王に婚姻の儀を成すのか成さないのか意思確認をとったと聞く。
この時、グレンダート国王が否やを答えていれば、恐らくセイィータ公爵はそれを諾々と受け入れていただろう。

政治的な絡みがあろうと、国王派に疎まれていると解っているセイィータ公爵が大切なご息女を魔窟である後宮に送り込む事などしなかったはずだ。

一体、誰が一番罪深いのか。
セイィータ公爵家のご息女である限り、始めから解り切っていたはずなのだ。

国王派とセイィータ公爵派の対立が、正妃となった女性に大きく影響する事を。

それでも、私は望む。
かつて耳の奥に残された優しく無邪気な笑い声をもう一度聞きたいと――――――――。

「それで、余の孫は何と？」

入室を許可され、レオンが片膝を着いた途端に鷹揚な声音が問い掛けた。
しかし、齢を重ねた声音はその年経た年数分だけ枯れて聞こえてしまうのは仕方ないとも言える。
それでも、七十を半ば過ぎてさえ他の同年代と比べれば随分とはっきりした声通りをしていた。

「次期メリレンチェ公爵後継者・レバンチェック殿の申し出を快諾し、《眷属》はメリレンチェ公爵のご養女（そくじょ）になる事が決定。また《

眷属》の懐妊の報と共にお披露目を兼ねた祝宴を開くとの事。その際には、セイィータ公爵令嬢であられた現正妃様の廃位宣言と新たな正妃の発表も行われるのは間違いないでしょう」

「……何とも予想通りで呆気ないものね」

ころころと笑って頷くのは、《黄昏宮《たそがのみや》》の主人であり、現国王・グレンダートの祖母である太王太后陛下のリエルアナである。

老いという肉体の衰えはみられるが、それでもきりりとした容貌は実年齢より随分若く六十前後の年齢に見せている。

《女》としての己の磨き方見せ方を良く知っている太王太后陛下は、長年後宮を牛耳っていた女主人でもある。

後宮という名の魔窟に君臨した女は、例え表向きは今の《華》たちに後宮（ぶたい）を譲ったと見えても実際は裏で鷹揚に構えて、定期的にそれと知られずに横槍を入れている。

事実、かつてグレンダートの子を身篭ったとされる《華》を後宮から無残に引き抜いて打ち捨てたのは、この一見して厳格でありながらも優しげな顔立ちの老貴婦人だ。

優しげな声音で、上品な仕草で、慈愛に満ちた微笑みで易々と人の命を刈る命令を躊躇いなく下せる、そんな人間である。

正妃腹以外の懐妊は認めないとして、呆気なく引き抜かれ刈り取られた《華》。

実の子であったギルリアード二世以上に孫のグレンダートを溺愛する太王太后は、グレンダートが愛妾腹の子を望んでいないと知ると、グレンダートの子と理解していてさえその芽を簡単に摘み取る。

その冷酷さは、後宮という名の魔窟を生き抜き牛耳った素質を如

実に表している。
優しさや慈悲、穏やかさや上品、そんな甘ったるいものだけで後宮の頂点に立つ事は出来ない。

「グレンも、本当にあの娘が愛しくて仕方ないのは解るけれど、よもやこうも呆気なく己の正妃を切って捨てれるとは……ふふふ、流石余の可愛い孫ね。そうは思わなくて、レオン」
「……」

求められる同意に、けれど頭を下げたままのレオンは何も返さない。
無言を肯定と捉えられようと下手な言葉は逆に命取りだと、この老貴婦人に仕えてから十年、身に染みて解っている。

また、レオンの答えなど実際は求めていないのだ。
己の思惑通りに事を進められるのならば、可愛がっている人間ですら朗らかに笑って殺すよう命じられるだろう。

この十年で、レオンが知るだけでも太王太后・リエルアナは確かに可愛がっていたはずの傍仕えの侍女や女官、己の縁戚筋の人間を十人程、容易く切り捨てている。

それ以外の人間ともなれば、闇に葬られただろう人数がどれ程となるのか。

息子のギルリアード二世の正妃すら、病死に見せ掛けて暗殺したという噂をレオンは耳にした事があった。内容が内容だけに、その噂も良くある王侯貴族の急逝を好奇心を満たす為だけに流れた一種の娯楽的噂話としてすぐに立ち消えたらしい。

「それにしても、《眷属》を得るなどという僥倖に恵まれるのは、国王としてのグレンのこれからがもっと素晴らしいものであるという証明ね。しかも、《眷属》が懐妊しているなんて。この国も安泰だわ」

確かに、世界中が水不足と砂漠化で悩まされている中にあって半年前、突然国王が連れ帰った娘の存在は、今や世界中が血眼になって欲しがる尊い存在でもある。

ここ二十年程は、極端な水不足や砂漠化は見られていなかったが、娘が遣って来た頃を境に王城を中心として井戸などで湧き出る水の量が増え、緑に芽吹く植物も多く見られ始めた。

それは、少しずつではあるが王都の外側へと円形状に広がっている現象だ。

その僥倖を前に、恐らく娘は豊穣の女神であり、大地母神と呼ばれる《トゥヌシュミュルルフォ》の《眷属》だろうと、神殿に仕える数多の神官や巫女たちは考えているようだ。

そして、娘に接した者たちの大半もまたそう思い至っている。

多産・肥沃・豊穣を約束する大地母神は、緑や水の女神(むすめ)達を統括する母神でもある。

雨と水の神(サライライサ)は、トゥヌシュミュルルフォ神の十二番目の娘だ。

大地母神・トゥヌシュミュルルフォの《眷属》がこの国に現れ、更には国王と子を成したとなれば、この国そのものが水蛇狩りの罪を許され、かつ大地母神の祝福を得たのだと。

今や、殆どの人間が信じている。

太王太后であるリエルアナでさえそうだ。
仮にその娘が《眷属》でなかろうと、今の国情不安が取り除かれ、水と緑が減らず増えているのであれば文句はないのだろう。
国王・グレンダートの治世が安定し輝かしいのであれば、《眷属》の娘がどうであれ、リエルアナは満足なのだ。

女として、祖母として、孫息子の花嫁となる女がどれ程素晴らしい人間であろうと、リエルアナの気性からすれば瑣末な事で粗探しをして不満を募らせ、そして気に喰わないと批判する。

だが、グレンダートに多大な利を齎すならば黙る口をリエルアナは持っている。

国益を齎すか否か。
国王である孫息子に有益であるか否か。

己と娘の相性が良かろうが悪かろうが、個人的な感情を後回しにして国とその頂点の国王の立場と利益を最優先に出来る程には、リエルアナは王族として義務と身の程を知っていた。

レオンはそんな太王太后の付きの親衛隊員であり、他に十人いる隊員を纏める役目を担っている。

貴族階級は伯爵位でり、軍閥貴族の嫡男として生まれ、その実家の方針で軍の下っ端から始まった叩き上げの軍人でもある。

かつては外軍の師団を率いていたが、親衛隊へ引き抜かれ、十年前からこの老貴婦人の守護をしている。
だが、レオンは太王太后であるリエルアナに忠誠を誓っている訳

ではない。
仕事と割り切って、老貴婦人の傍にいるに過ぎない。
しかし、その忠誠心のなさを覚(さと)られるような青臭い人間でもなかった。
レオンにとっての主君は、未だただ一人先代国王・ギルリアード二世である。
治世短く、若くして逝った先代国王とこの目の前の太王太后の容姿は然程似ていない。
髪の色と顎の線の細さ位で、その程度なら赤の他人同士でも似通った部分として上げられる外見だ。
だからだろうか。
レオンは時折思うのだ。
ギルリアード二世は、本当にこの女性の子だったのだろうか――と。
その考えを口にすれば、途端首を刎ねられても仕方ない不敬なものだ。
先々代国王とギルリアード二世は、瞳の色と容姿が似通っていたが、反してその気性と体質は全く極端な程に似てはいなかった。
気性激しく、気に入らない事があれば簡単に周囲の人間を罰して来た事で恐れられた先々代国王は、遠出と狐狩りが趣味の精力的に外遊に出る国王で健啖家でもあったという。
また、後宮に多くの《華》を持ち、その数は二百近くだったともいう。

故に、愛妾に生ませた王位継承権のない子は記録されているだけでも百三十二人。
尤もその大半が、父親である先々代国王の手に掛かって赤子の内に死した。子供嫌いだった先々代国王は好色家とも知られ、必要なのは子供ではなく《女》だったのだ。

そんな男の子供であるギルリアード二世と言えば、どちらかというと内向的で幼い頃は大半を図書室で過ごす大人しい子供だったという。
生まれながらにして病弱だったせいもあるだろう。
気弱なところが見られ、政治的能力も凡庸。故にその能力に長けたセイィータ公爵を頼るようになったのは必然と言えたかもしれない。
父親の持つ後宮の《華》やその子供たちの扱いを直で見て育った為か、ギルリアード二世自身は、後宮に多くの《華》を持たなかった。
持ったのも、政治的な絡みがあっての事で、その《華》との間に出来た子を殺すような事もなかった。

そして、ギルリアード二世の母親である太王太后・リエルアナは元々《華》の一輪、愛妾の一人だったが、先々代国王の寵愛は数多の愛妾たちの中でも五本の指に入る程には深かったという。
先々代国王の正妃は、三年間子が出来ないままに離縁され、リエルアナが新たな正妃となったギルリアード二世を生んだのは有名である。

「ああ、それにしても楽しいわ愉快だわ」

唐突めいてリエルアナが言った。
その言葉に、思わずレオンは顔を上げてしまう。

そこには、恍惚に満ちた表情を浮かべる太王太后がいた。

何がそれ程までに愉快なのか。

豪奢な長椅子に投げ出した半身を揺らして「ふふふふ」と笑う。

いっそ、狂気が含まれた嗤いに見え、レオンの背筋が奇妙にざわりと震えた。

「あの忌々しい女に何処となく似ていた娘が、廃位されるなんて。ああ、本当に忌々しい事この上なくて仕方なかったのよ。何を遣っても後宮から追い出す事が出来なくて、本当に…っ」

嗤いながら、ぎりりと眦をあげたリエルアナの姿は、今までレオンが見た事がない程に憎悪に満ちていた。

だが、背後に控える侍女や女官たちは微動だにしない。

まるで規律厳しい軍人のようで、また良く訓練された犬のようでもあった。

ここにいるのは長くリエルアナに仕えて来た者たちばかりで、忠誠心や服従心は他の後宮にいる侍女や女官たちとは比べようもないだろう。

年若い者でさえ、長く仕えている者たちの血縁者で固められている。

幼い頃から、徹底的にリエルアナに仕える事だけを教え込まれているはずだ。

そんな忠実な者たちでさえ、ほんの少しでもリエルアナの気に障れば殺されるのだ。

だが、そうしたリエルアナにも殺された者にもここにいる者たち

は誰一人として眉一つ動かさず、顔色ひとつ変えない。

下手な軍隊よりも空恐ろしい事に、一種の狂信者たちの集団でもあるのだとレオンは知っている。

「障害になる父親は死した。その娘は後ろ盾もない。ならば尚の事、何をしようと構わないわね」

狂気に満ちた目は、それでも理性が残っているからいっそ恐ろしい。

生死と隣り合わせる出来事に、軍人であったが故に多く直面して来たレオンでさえ、一見すればか弱き老貴婦人に恐怖を感じた。

一体、何をそれ程まで憎んでいるのか。

一体、セイィータ公爵の息女が何をしたというのか。

「レオン。お前に命じます。人気(ひとけ)が最も少なくなる宴の時に、廃位される女を余の前に連れて来なさい」

それは拒否を許さぬ命令だった。

それに反していっそ耳に心地好い程に声音は柔らかく、ふわりと浮かべた笑みは何もかもを許す慈愛に満ちていた。

しかし、そこには何かしらの怨念を湛(たた)え、狂った思いがあるのは決して否めない。

それをいっそ清々しく隠せてしまえるリエルアナの淑女としての姿は感嘆に値するのだろう。

レオンは、ぎゅっと縮んだ胃の痛みを無視し、ただ頭を下げた。
後宮の《華》たちも全て呼ばれている祝いの宴。
愛妾たちに《眷属》の姿を、その寵愛のされようをまざまざと見せ付けようとしているのだ。
国王は。

だが、そこに正妃・アリアは呼ばれていない。
一気に人気がなくなる後宮は、哄笑をあげたくなる程に警備体制が甘くなる事だろう。
空々しい護りの中では正妃に何があろうと、誰も気にしない。
国王でさえ解っていながら、そうするのだから。

宴の盛り上がりが最高潮に達する時が、正妃を攫い易いだろう。

レオンは、リエルアナの命令に「諾」と答えた。

耳の奥に残る、憂いない幼子の笑い声。
だからこそレオンは決意した。

魔窟である後宮から、連れ出してしまおう――――――と。

ギルリアード二世という、国王として生きるには優し過ぎた主君を思い出し、レオンはその母である太王太后・リエルアナを胸中で切り捨てた。

ただ、リエルアナがギルリアード二世の母であったから。
だから、今まで仕える事が出来たのだと今更に実感し、手本のような優雅な所作でその場を辞した。

太王太后にとって、正妃・アリアの境遇とその面立ちが、最も忌み嫌った女と何処となく似ているというだけで憎しみの対象となっていたのだとレオンが知るのは後の事。

9　騎士・レオン（後書き）

外軍（がいぐん）→国境に隣接する地に駐屯している軍。
内軍（ないぐん）→王都及びに王都に隣接した周辺の地に駐屯している軍。
領軍（りょうぐん）→領主が私的に抱える私有の軍隊。治安維持に努める警邏隊を兼ねている。領主によっては経済的理由で領軍を待たない場合もあり、その場合は国軍から軍人や警邏隊が派遣されている。

10　女官・ナディシーフェ

常に平等でありなさい。

平等ではあっても、それは《華》という愛妾同士たちを同列に見る事で、そこには決して正妃は連ならないと知りなさい。

正妃は、次代の国王を生む大切なお方。

お前の目で見て耳で聞いて、口を閉ざして、時折、その閉じたはずの口で真実を問いなさい。

語るべきは、お前の職務を忠実に実行する為の事項を。
聞くべきは、溢れんばかりの中傷や嘲笑の中からの事実を。
見るべきは、着飾って纏った虚飾ではない実像を。
黙すべきは、国の乱れを後宮から生まれさせない為に真実を。

国王陛下の害になるならば、それを処断する権利の一部をお前は有している。

長きに渡ってヘドロの様に染み付いて消えない数多の怨念の渦中たる後宮で、お前はお前に与えられた職務を全うする事が生きる道。

そう諭され、そう生きるのだと思っていた。

しかし、それが理想でしかないのだと知るのは早かったのです。

《美しい女》という姿の魔物たちが囀り合って、国王の寵愛を乞い、そして時に強請る後宮（ば）に巣食う闇はあまりにも深くて暗い。

一度、その底を覗けば二度と知らぬ振りが出来ないだろう程に、

足元を掬われ引き摺りこまれ、または自ら進んでその底へと己(おの)が身を投じる。

そんな場へ、生まれた時からすでに後宮入りが決定していた公爵令嬢。

新たな子が《女》としてこの世に生まれ落ちた瞬間に、国王陛下の寵を得られるようにと、後宮に送り出す算段をつける貴族たちは数多いる。

正妃となる事を前提に、幼い内から教育される子供たち。

けれど、今代国王陛下の正妃は、若くして逝かれた先代国王の御世に決定された。

息を引き取る前に、遺言という形で告げられた。

幼くして国の頂点に立った少年王と、許婚の初顔合わせの儀に後宮女官長として同席を許されたそこで、初めて間近に見た公爵令嬢。

齢五歳では、当然《女》としての《色》などあるはずもなく。

何処となく、揺れた焦げ茶の瞳を見た。

対峙している王は、興味の一片も示さずただ義務のように挨拶し、そして返された踵。

残された姫君は、そんな国王の背中をじっと見詰められていて、暫くして父親であるセイィータ公爵に問われた言葉。

どう思う？――――優しい声音と眼差しで娘を見遣る公爵の言葉に答えた姫君は、確かにはにかんでいらっしゃった。

言葉のない答え。

柔らかく目を細めて、国王が去った向こうを見て、頬を微かに染めて。

とてもとても、可愛らしく。

それが全てを語っていて。

子供特有の柔(やわ)い空気がそこに満たされ、張り詰め固まっていた空気が緩む。

隣にいた今は亡き先代王宮女官長がホッとした表情を見せ。

姫君の方は、どうやら大丈夫のようね――――――そう零した。

いっそ、何が大丈夫だったのだろうと今も思う。

婚姻の儀に際して後宮入りした姫君の、その無表情に、かつて見たはずの柔らかさがなくなっていた事にいっそ戦慄したのを覚えている。

何があって――――――それを思い巡らせて、けれど思考の巡りを止めた。

やるべき事はたくさんあり、後宮の中に咲き乱れてその美しさを競い合う愛妾たちを束ねる術(すべ)は日々どれだけ頭を悩ませても悩まされるばかりで、けれどそれでも後宮女官長しての責務を放棄する事など矜持が許さなかった。

平等であれ。

他の《華》と同列に見てはならないのが、正妃。

先代の後宮女官長から、確かに幾度となく教え込まれていたはず

のそれらは、けれど私にとっては優先事項にはならなかった。
その選択を過ちだと、誰かは詰り、それが人間なのだと納得し、所詮は権力に阿る一使用人として見られるのだろう。
高貴な生まれの、歴史ある血統の、王族と比肩した存在でありながら、決して国王陛下に寵愛を注がれない王妃。
実を結ぶ事もなく。
いずれは、確実に枯れてしまうだけの哀れな存在。
同情はしなかった。
後宮の全てを采配すべき身でありながら、その一切を自ら放棄するように周囲への関心を一欠けらとて見せない硝子玉のような瞳の存在に、呆気なく失望を覚えて、私は自らの意思で《暁宮》から足を遠ざけた。
人気ない寂しいばかりの宮を尻目にして、私は後宮を監督し監視する者であると同時に、すでに後宮を辞して隣の離宮《黄昏宮》に暮らす女主人の《犬》でもあった。
女官長としての矜持を持ちながら、同時にその矜持は今代の正妃に従順するものではなく、忠誠と服従を捧げたのは太王太后陛下。
その事を後悔はしていないけれど、誰にも顧みられない存在の軽さに幾度となく己の主に成りえなかった正妃そのものを嘆く。
本来なら、後宮の管理に関して正妃に相談して采配を揮って頂き、時として意見を述べ、正妃の直属ともいえる存在として後宮を束ねていく。
そんな後宮女官長としての私を決してないものとした正妃を労わ

り敬い、膝をつき頭(こうべ)を垂れるに足る人物だとは決して思えはしなかった。

だからというには、この王城の中で誰が敵になろうとどれ程の人間が敵意を向けようと、夫となった国王陛下だけは正妃の味方でなければならなかった――――それが成り立たない現実を前にして、王妃の心情はどうであろうか。

それを考えるのは、しかし私ではない。

親身になるには身分の差ではない隔たりがあり、憐憫を向けるには自業自得と思わざるしかない正妃の無関心な態度があり、敬うにはその要素は皆無で。

いずれ枯れていくその高貴な身は、一体その硝子玉の眼差しでどんな未来(さき)を見ているのでしょう。

いずれにせよ、私の忠誠も服従も正妃のものではなく。

従順に頭(こうべ)を垂れるべき主人でもない。

後悔はしない、と。

太王太后陛下に膝をついた時、そう思っていた。
何があろうと、どんな事になろうと。

未来(さき)が見えないのは同然だと解っていても、幾らでもどんな風にでも想像する事は出来たはずで。
けれど、そこに破滅の風景(みらい)を私は見た事はなかった。

王妃様。
貴方は、嫁ぎ先を間違えたのです。
想いを寄せる人物を見誤ったのです。

貴方を、そこだけは哀れみでもって私は見てしまうのです。

「女官長」

官位を呼ばれ、ナディシーフェは顔を上げた。
後宮に与えられている室で、王宮から後宮へと充てられる費用に関して新たな申請書類を書き上げている時だった。

寄る年の波には敵わず、ここ数年手離せなくなっている眼鏡をずれている訳でもないのについ癖で押し上げる。
ノックに応えたのはいいが、顔もあげずにいてしまった事にナディシーフェは内心溜め息を吐き出した。

ここ半年、後宮で使われる金(かね)の減りが早い。
王廷費から《華》のそれぞれに割り当てられる金額は事前に決定されていて、どのような事情があろうと一年間変わる事はなく、《華々》にも関係ある来期の王廷費を決定するのには今の時期は幾らか早い。
自らを美しく着飾り、その美しい容貌や肢体を保つ為の費用が王廷費から回される金額だけでは足りない場合、皆実家や後見人など

からの援助で賄っている。

後宮に掛かる費用で、王城の財源を逼迫してはならないのだ。

いかに多くの《華》を抱えたのだとしても、後宮が原因で国庫が枯渇となる事態を招いたなどとなれば、それは国としての大きな恥となる。

傍若無人で好色家でもあった先々代国王でさえ、多くの愛妾とその子供達を抱えてはいても国庫に影響を与えるような金の使い方はしなかった。

寧ろ、好戦的であったが故に戦に財を注ぎ込む傾向があり、それはそれで過剰になれば問題でもあった。

人件費も、《華》が後宮入りに際して自ら連れて来た者たちに対しては《華》たち側に支払い義務がある為、財源圧迫の軽減となっていた。

本来、後宮費と称される後宮に充てられる費用の使い道は主に後宮管理にその維持、人件費などであって、愛妾たちに割り振られるのは王廷費を財源としてこれも決まった金額分の食と住のみだ。

実家や後見人に財があればあるだけ、身分ではどうにもならない贅沢さに差が出来る。

故に、実家の財が乏しい《華》であれば財力を持つ後見人を得て初めて後宮入りするのが慣例となっていた。

また反対に財のある者は、身分ある女性の後見人となって後宮へと送り込む。

半年前、新たに後宮入りした《華》は当初から実家はなく後見人もいない状態だったが、それも国王の寵愛と国王派からの援助で、

贅沢品に使える財は今や大商人の祖父を持つカロリング伯爵令嬢・ミアリリスよりも上だった。

それでも十分だというのに、国王の命令で後宮費の一部がその《華》に充てられるようになっている。

しかも、一部とは言っているが実際は日に日にその支出額は後宮費を食い荒らし出している。

今期に充てられた全額からして、あと三月(みつき)足らずで底が見えて来るだろう。

ナディシーフェはそれに内心では顔を顰めつつ、けれど諾々と受け入れた。

何故なら《眷属》が齎しているのだろう水と緑はあまりにも魅力的だ。

それを輸出して、新たな財源確保にしようという計画が進んでいる。

水不足と砂漠化の停滞から転じて、この半年は水も緑も増えているのは傍目にも明らかになって来ていた。

それを生み出しているだろう《眷属》の希少性は、何をどれ程費やそうと手離してはならない。

だが、と。

ナディシーフェは考える。

脳裏に浮かぶのは可愛らしい顔立ちの娘。

後宮に長くいるナディシーフェの目から見ても、《眷属》の立ち振る舞いや言動は他の《華々》と比べて圧倒的に子供染みて物知らずだ。

淑女の礼儀作法やこの国の歴史や各国の文化など。
多岐にわたる教育を施す為に、幾人か教師をつけているがあまり芳しくはない。
正妃になれない愛妾でさえ、正妃になれる機会(チャンス)を想定して正妃として立った時の手腕を磨く為の勉強を自ら進んでしている者も多いというのに、正妃となるだろう《眷属》の娘にその様子は未だない。

それでもこの厳しい後宮にあって笑って許されているのは、国王の寵愛の深さと《眷属》という肩書きがあるからだ。

「どうしました？マイラ」

入室していた相手に顔を向けた。
《眷属》付きの女官の一人だ。
年が近い事とメリレンチェ公爵の遠縁という理由で《眷属》付きとなった娘は、一枚の紙を差し出して来た。
それを受け取り素早く目を通す。
その内容に、眉間に皺を寄せた。

「つい先日、追加で費用を回したばかりのはずです」
「ええ、解っています。ですが、此度の宴では生半可な装いではいけません。誰よりも立派で美しく着飾るべきですから」

一歩も引く姿勢はないと、視線を向けて来る。女官になって日が浅いというのに、女官長であるナディシーフェに対して随分と強気に出て来る。

それを元来の性格とみるには、聊(いささ)か度が過ぎていて、ここ最近どうにも《眷属》付きの者たちに見られるようになった鼻につく態度

だった。

国王の寵愛も深い《眷属》の傍に仕えているという優越感に酔っているとも感じられるのは、後宮女官長であるナディシーフェを見下していると解る程に、その目が語っているからだ。

それを隠せないところが若さ故か経験不足故か。

どちらにせよ、この場合身の程を弁えていないマイラにナディシーフェは失望する。

マイラはその年齢と経験不足の割には、仕事の覚えが早い優秀な女官なのだ。

そこで身の程を弁える思慮を持てるなら、僅か数年足らずで女官長補佐にもなれるだろう。

渡された紙片は、後宮費から《眷属》へ幾らか費用を回すよう要求する書類だった。

すでに何度目であろうか。

つい先日にも、国王の命令にもある通りに後宮費の一部を回している。

その金額は、結構なものだ。

いずれ正妃の廃位の発表に前後して《眷属》のお披露目がされるだろうと見込んで、いつもより五割り増しの費用を回していた。

衣装類だけが身を飾る物ではない。

装飾品の類(たぐい)など、凝った意匠でなくとも宝飾品としての石ひとつでさえ容易に金を食う。

更に、その《眷属》の周囲にいる侍女や女官たちまでその身を飾り立て始めている。

一見して衣類などはそうと解らないが、それでも使われる生地は他の後宮勤めの者たちより品質は上であり、装飾品として彼女達に

唯一許されている既婚者かどうかを示す腕輪に使われる素材もやはり品質に金を使っている。

現国王陛下の正妃が嫁して来る直前まで、後宮内外で権勢を揮っていた先々代国王の妃であった太王太后陛下でさえ、《正妃》として相応しい装いはしても過剰な装飾は避けており、その侍女や女官たちも身の程をきちんと弁えていたのだ。

ナディシーフェは、マイラが未婚を示す為右腕に嵌めている細めの腕輪に視線を走らせ、頭痛を覚えてしまう。

いかに、《眷属》付きでありメリレンチェ公爵家の所縁（ゆかり）の者であっても、後宮内に措いて表舞台に立てるのは、正妃と愛妾たちのみなのだ。

マイラの腕輪に嵌められた宝石の類（たぐい）は、いかに単調な細工であっても見る者が見ればその価値に気付く。

私的な場で、私的な立場でならそれは許されただろうが、後宮（ここ）では駄目だ。

「マイラ。あなたの言い分は尤もでしょう。眷属様が身に付ける装飾品や眷属様自身の美しさを磨く消耗品などにならこちらも追加の費用を出しましょう。ですが、あなたは一介の女官。その意味が解りますか？」

「……」

ナディシーフェの窘める言葉に、年若いマイラの柳眉が歪んだ。

何を指しているかは解っているようだ。

それでも不満を示している。

「お言葉ですが、私は眷属様付きの女官です」

「例え、そうであろうと一介の女官はどこまでも女官です。本来後宮費から一部といえど、特定の人物に費用を回す事はありません。王妃様にさえそうです。それを敢えて回しているのは、国王陛下の命令と《眷属》という理由があるからです」

回している後宮費は、《眷属》が齎すモノを考えれば回収可能であるから回しているのだ。

そうでなければ、幾ら国王の命令であろうとナディシーフェは諾とは頷かなかっただろう。

後宮の管理・維持は大切で大変な仕事だ。

《華》のそれぞれに政治的絡みが十二分にある以上、彼女達が後宮に住まう間は決して不自由させてはいけない。

そうナディシーフェは思っているが、唯一の例外である正妃・アリアの事は敢えて考えないようにしていた。

「あなた達には、眷属様を支持している方々から十分な賃金が出ているはずです。そして、後宮には後宮なりの規定があります。それを女官風情のあなた達が侵していい理由はありません。後宮費から回されている金銭の一部をあなた達使用人が着服している事実を、よもや私が気付いていないなどと思ってはいませんね？」

鋭い眼差しでナディシーフェはマイラを真っ直ぐに見た。

《眷属》に使われるはずの金銭の一部を、《眷属》付きの者たちが自由にしている。

すぐにその事実に気付いたナディシーフェは、けれど敢えて今までその事実を追及・叱責した事はなかった。

身の程を弁え、《眷属》付きとしての《眷属》に恥を掻かせない為に身を装う程度ならば見逃しは幾らでもした。

だが、マイラの腕輪に使用されている宝石は幾ら小さいものであ

っても、一介の女官風情では中々手を出せない類(たぐい)の物だ。
そして、宝石を使った装飾品を《眷属》付きの侍女・女官たちが幾つも所有し始めている事実をすでに把握しているナディシーフェに見逃せる物ではなかった。
更には《眷属》付きの騎士たちの一部も、城下で派手に金を使い始めているという噂を耳にした。

そんな事実は、裏を返せば逆に《眷属》の評判を貶める事になりかねない。
その事に気付けない者たちばかりではないはずだ。
確かに厳選されたはずの者たちなのだ。
けれど、目の前に横たわる現状にナディシーフェは思う。
《眷属》付きというだけで、彼らや彼女らは「自分たちは特別な人間である」と勘違いしている。

特別なのは、あくまで《眷属》自身。

「身の程を弁えなさい。あなた達のしている事は、いずれにせよ眷属様の為にもなりません。すでにこの事は太王太后陛下に報告済みです。事と次第によっては、眷属様付きの者たち総入れ替えもあると念頭に入れておきなさい」

傍仕えの者たちの総入れ替えという通告に、マイラの顔から血の気が引いている。
言外に、猶予を置いていると込め、それと共に改善の余地がなければ実行すると含む。

ここまで言われて改善の為に何一つ動かない人間はいないはずだ。
流石に《眷属》付きとしての立場を自らの愚行で手離そうとは思わないだろう。

《眷属》付きになりたいと思う人間は、あまりにも多い。
その立場を幸運にも得た者たちは、容易に現在の地位（ステータス）を捨てられないし、捨てたくはないはずで。

ナディシーフェはマイラに差し出されていた紙に書かれた幾つかの数字や品名に訂正・削除を入れると最後に自らの名前をサインする。
後は、財務管理を司る室がある王宮西棟へ行って申請するだけだ。
王室財政の管理もしている現在の財務総監は熱心な国王派で、更に言えば《眷属》という存在に対しての昔からの信奉者だ。
すぐに要求・申請は許可されるだろう。

マイラにそれを差し出すと、相手は一瞬受け取る手に躊躇を見せた。
要求した金銭の一部は、自分たちのものになるはずだったが故の後ろめたさか。

ナディシーフェは、それを受け取って退出して行った女官の姿に溜め息を零す。

贅を凝らす事の許された、今は《愛妾》という立場の《眷属》。
片や国内外的にも法的に認められた妻でありながら、質素な生活を送るしかない《正妃》。

対極に位置した二人の娘の姿を脳裏に描（えが）いたナディシーフェは、だがすぐにそれを脳裏から追い出した。

いかに《眷属》の存在がありがたいものであろうと、でしゃばり過ぎても問題だ。
ナディシーフェにとって本来国王よりも遥かに上位である《眷属

》は、だが決して国王や太王太后より上には成りえないのだ。
《眷属》自身も、その周囲の人間にもより一層の教育が必要だろう。
その手配を早急にしなければならない。
（そういえば……）
ふと、ナディシーフェは思う。
正妃たる女性は、正妃としての采配を揮う能力が実際はあったのだろうか――――と。
しかし、そんな事を考えても所詮は冷遇されて廃位される存在。
まして、ナディシーフェが従うのは太王太后・リエルアナのみ。
《眷属》といえども、太王太后陛下の後ろに控えているべきだろう。
今一度、眼鏡をきちんと掛け直して書類に再び眼を通す。
懐妊した《眷属》の、国王陛下の子の為に、組まなければならない予算の案も提出しなくてはならないのだから。

１１　庭師・イザフ（前書き）

若干の性的表現があります。
人に依っては不快に感じるかも知れません。
ご注意下さい。

11　庭師・イザフ

幾度かお見掛けし、その内数回は直接声をお掛けした。

けれど、それら全てに返って来たのは無機質な眼差しと、何も浮かんでいない面（おもて）。

それに心が折れそうになった。

何か言って欲しかった。

どうか笑って欲しかった。

……どうして、そう思ってしまったのか。

今となってはよく解らない。

どちらかと言えば、何と傲慢に返されたのだろうとさえ今は思う。

所詮、下町育ちの下賤の者など、公爵令嬢が気に掛ける必要も、その視界に入れる要素もなかったのだろう。

無視された、のだ。

無視、される存在なのか。

自分は。

あああ、そう思えば何とも憎らしい。

何て何て嫌味な存在なのだ。

国の頂点たる国王陛下の伴侶となりながら、冷遇されているという噂話を聞く度に胸がすく思いがするのだ。

だからどうか。
どうか、あなたはいつまでも蔑ろにされ続けて下さい。
何処までも貶められ続けて下さい。
いっそ、その身ごと心まで下賤と蔑まれる底辺まで落ちて来て下さい。

本当に厭わしい。
あなたを、出来るならばこの手で引き摺り落としたい。
そして、あの日あの時、何一つ返してはくれなかったあなたと同じ何もない眼で何もない顔で、あなたを見下(みおろ)したい。

そんな歪んだ願望など叶うはずはない。
嗤える程に、あなたは真実遠い存在だったのだ。

イザフは、気怠い体を女の上に落とした。
横たわっている女の顔が、シーツに埋めた己の顔のすぐ横に来る。
息が触れる程の距離。

どちらも、乱れた息遣いを胸を喘がすようにして暫く。
整う時には、掻いてしまった汗を知らずに拭い、独特の臭気の中淫らな空気(ふんいき)を少しずつ遠ざける。

お互い何も身に纏わず、申し訳程度にあった上掛けの薄い布団が足許へと蔑ろにされていた。
この季節。
寒気は遠くあり、汗がまだまだ引かない肌をざわりと鳥肌立てる事はなかった。

今更、思う以上に長い馴れ合い同士でどちらも裸を恥ずかしがる性質(たち)ではない。
イザフの肩を掠めるようにして女の腕が動き、簡素な寝台の脇にある台の上へと置かれた煙管を手にする。それを見てイザフは女の上から身を引き、ごろりと横たわった。
女は上半身を起こして、その華奢な背中を寝台の上部が寄せられている壁に預ける。
慣れた所作で火皿に丸めた刻み煙草を詰めると、その雁首を同じく台の上に置いていた煙草盆の炭火へと近付けて暫く、女は紅(べに)の落ち掛けた唇でゆっくりとそれを喫(の)む。

相変わらず、実に美味そうに喫むものだから、煙管を好まないイザフでさえこの女の喫煙には好ましい感情を覚えていた。

「……それにしても、旦那相手は楽でいいねぇ」

喘ぎ疲れた掠れ声は、奇妙にもしみじみとした実感が篭っている。引いていく汗の心地好さと吐き出した欲望のこれまた心地好い疲れに、睡魔がするりとイザフの手を掴んでいたが、女の声音に意識がそちらに向いた。
途端、睡魔が呆気なく手を引いて去って行く。

「あ……？」

生返事にも似た訝しい声が出た。

そんなイザフへ視線を流して、《春》を売る女は少しずつ年を重ねる口元に笑みを見せ。

「ここ最近の上客がねぇ」

と、何とも意味有り気に口にする。だから、イザフは女がこちらの気を引きたいのだとすぐに気付いた。

付き合いは、十二〜三年にもなろうか。

女が十四で初めての客を取ってから、女を買った四人目がイザフだったという。

その頃から続いているのは、イザフ一人だ。

女はそこそこ器量が良く、そこそこの性質(たち)でそこそこに客あしらいが上手く、そこそこに馴染みの客を持っている。けれど、長く続く客は少ない割に不思議な事に年毎に上客を一人か二人絶対持っているのだから、《女》という生き物は本当に底が知れないとイザフは常々思っている。

王都の中心から西へ暫く。商業区域を奥に行った処にある花街は常に賑わっている。

その中でも中堅処の娼館で、これまた中の中辺りにいるのがこの女だ。

二十も半ば過ぎともなれば、よほど容貌も肢体も良くなければ、この花街(せかい)でかなりの年増扱いだ。

売り上げは上位ではないけれど、底辺に落ちる事もない。

年をとろうと、年々変わりなく安定した客足を掴まえて娼館に金銭を落とす。

かと言って、女を身請けしたいと申し出る客がいる訳でもない。

また女も己の現状を嘆いている様子はなく、まして身を売る行為を忌避していない。

身を売るまでの十四年の過去をイザフは知らないし、女も語った事はない。

口が堅いと言うには、だが閨での睦言に関して意外にも女は口が軽い。

客にとっては口の堅い娼婦が有り難いのだろうが、娼婦たちに忠誠や服従の心などあるばすもなく。金を運んで来る客がいれば、金回りの良い方を損得勘定で選ぶ。時には、相性の良し悪しで相手（きゃく）への口の軽さは量られる。

そして、一部の客はそんな口の軽い娼婦を好む。

客自身は、自分自身を語らず娼婦（おんな）の口から他の客に関して語らせる。

閨で語られる些細な話も、掻き集めれば馬鹿には出来ないし、些細で何気ない呟きひとつが重要だったりするのだ。

一夜のみだから、とか。馴染んだ関係だから、とか。

気の緩みや気安さで口を開く客は所詮、何事が起ころうとそれは全て自業自得でしかない。

それは、昔から花街にある不文律のひとつでもある。

「何て言うのかねぇ。口が軽くて軽くて、ちょっと頭が足りないんじゃないかって思うんだよ」

娼婦に言われてしまうとは、ある意味同情も出来ない。

粋な遊びが出来ていないという証拠だ。

イザフは興味を覚えて、女の剥き出しの太腿に頭を乗せた。

一月に一度。月に稼ぐ賃金の約三分の一の値段で、この目の前の女を買っていた。

娼館に通い出した切っ掛けは何だったか――――。

（ああ、そうだ）

思い出す。

庭師の見習いとして働いていた先の貴族の屋敷を、勢い辞めてしまったからだ。

過ぎた記憶にある、振り向かない影。

それにひたすら苛立ち。

そして、そこから飛び出して離れた。

もうそこには戻れない。

むしゃくしゃして八つ当たりとして女を買って、そして乱暴に抱いた。

それから、何故か馴染みとなっている。

何が切っ掛けで知り合うか、本当に解らないものだと。

ぼんやり思いながら、女を見た。

燻(くゆ)る細長くて揺らめく濁った白が眼についた。

「その客ってのがね、あの眷属様の騎士様何だよ」

驚きだろう———と言外に含む笑いに、イザフは「へぇ」と返した。

今、国中で噂になっている《眷属》様。

どうやら大地母神・トゥヌシュミュルルフォの《眷属》なのだとか。

その話には、国中が喜びに湧いている。

それもそうだ。

《眷属》と言えば、創世記において十三人しかいない最高位神と

人間が交わった事で生まれた神と人間の血を引く子を祖とした血脈に現れるという現神(うつつしん)だ。
血族自体は、神の血を引いてはいても普通の人間と変わりはない。けれど、その血脈の中から或る日突然顕現するのが《眷属》だ。神と人間との間に生まれた最初の子でさえ、生きて死ぬまでただの人間でしかなかったが、《眷属》は違う。
寝物語として幼い頃から聞かされて来るから大陸中の誰もが知っている。
《眷属》は、神の嫡出子と位置付けられている。
故に、下位や中位の神々よりも上位であり、また上位神として名を連ねる神々より時として上位にあるとさえ言われる。

それは神話であり伝承であり、お伽話だ。

しかし、実際幾つかの国の史実に《眷属》は幾度か登場している。その中で最も有名なのは、軍事・戦争を司る男神である帝神(ていしん)・ウォルバレンの《眷属》だ。
五百年程前と二百七十年程前に、戦場を駆け抜けてとある国に大勝利を齎したとされている。
詳細は秘されているが、実在した事は確かなのだ。

だからこそ、人々は《眷属》という存在を疑わない。

イザフは、王宮にいるとされる《眷属》自体に興味は微塵もなかった。
水不足と砂漠化の危機など別にして人間(ひと)に限らず、死ぬ時は死ぬのだから。

「その騎士様と比べて、俺はどう楽なんだ？」

問えば、女はひとつ煙管を喫み。

「無理な体位を強要しない。うざったい程にこちらの感じ方をいちいち訊いたりしない。馬鹿らしい程に卑猥な言葉を並べ立てる事がこっちも感じるんだと勘違いしない。ねちっこい程にしつこく体中を嘗め回さない。いい加減にしないかと怒鳴りたく程に長々とひたすら腰を自分本位に振りまくったりしない……そんなところかねぇ」

「……そりゃ、俺は淡白だからな」

一体、どんな行為（プレイ）を実践しているんだ———まざまざとイザフは呆れた。

元々、イザフは淡白だ。

溜まったモノを吐き出すだけの行為に、一応気遣いを相手（おんな）に見せるが、買い上げた時間一杯淫らな行為に費やしはしない。

ヤる事ヤって、後は時間までだらだら過ごす。

「こっちも仕事だから、最後まで付き合うよ。それにまぁ顔も体も金払いも良いんだよ。……良いんだけどねぇ」

客商売である以上、女はきっちり相手はするがそれだけだ。

そんな女に反して、その騎士はどうにも女に入れ揚げているようだ。

《眷属》付きの騎士という事は、精鋭中の精鋭で構成される親衛隊。そうなると貴族出身は間違いない。

女を身請けしようと思えば出来るのだろうが、外聞はあまりにも悪い。

これが、女が王侯貴族も相手にする高級娼婦であれば妾として身請けする事も悪くはない。

女自身は、その騎士に興味も好意もない様子だからイザフは笑う。

「どうにも、こっちが訊いてもいないのに眷属様の事をぺらぺら喋るんだよ」

自慢したいんだろうけど――――そう零した女は、騎士の事を思い出しているのか、そのくすんだ眼(まなこ)に憐憫を浮かべている。

《眷属》に関しては、その傍近くの人間がぺらぺら喋っていいものではないと。

一介の市井の民であるイザフでさえ容易に解るものだというのに。

「何でも眷属様は、寵妃って呼ばれているそうだよ」

「寵妃？正妃以外の女は、身分も財力も関係なく愛妾じゃないのか？」

広く知られた話だ。

初めて訊く名称に、イザフは眉根を寄せた。

「あたしもそう思って訊いたんだよ。騎士様が言うには、愛妾たちの中でも群を抜いて王様の寵愛深い女で、更に他の愛妾たちを見向きもせずに王様が愛でる愛妾を呼ぶ隠語何だとさ」

《妃》を冠するのは、正妃のみだ。

その中で愛妾たちに《妃》は与えられない。

更に話をよく聞けば、正妃に子供がない場合という条件がついた時、初めて《寵妃》という呼ばれ方をされるのだという。

つまりは、いづれ正妃は廃位され、次の正妃はその愛妾なのだと暗に示しているのだ。

幾つかの条件が揃わなければ、幾ら新たな正妃になるだろうと目(もく)

される愛妾(もの)であっても、寵愛が群を抜いていなかったりすれば決して《寵妃》とは呼ばれないらしい。

後宮など、イザフにしても女にしても遠い世界の話で、況してそこは閉ざされた世界でもあるから内部の実話など滅多に見聞きする事などない。

けれど、と。

イザフの眼が奇妙な気配を湛えて細まった。

灰吹きの縁(ふち)を軽く叩いて女が灰を落とす。

その所作を眼で追ったまま、イザフの脳裏に甦る一人の少女。

幼い肢体と幼い顔(かんばせ)の、けれど人形めいた感情(いろ)のない娘。

「寵妃様、ね。なら王妃様はどうなるんだ？」

「どうにも、お城じゃあ本当に冷遇されているらしいよ。噂には何となく聞いてはいたけどねぇ、王様さえ全く見向きもしないんだとか。あたしらが知る分には、王妃様は良くやっていると思うんだけどねぇ」

噂はどうであれ、城下の人間にしてみれば正妃は正妃としてきちんと仕事をしているという認識がある。

結局のところ、評判は良くもなければ悪くもない。

民にとって悪女でなければ幸い。後は、次代の国王を無事生みさえしてくれれば良いだけの話なのだ。

「騎士様が言うには、どうにも王妃様のご実家は没落の一途(いっと)らしいじゃないか。確かに御当主様が亡くなったって話には聞いたけど……一体全体、何がどうなってんだか。まぁ、眷属様が王妃様ってのが一番なんだろうけどねぇ」

国が荒れなけりゃ別に誰が王妃様でも構わないさ――――女は気怠げに言った。

それが国民全ての根底にある偽ざる本音だろう。

イザフも同じ思いだ。

「それにしても可哀想じゃないかい。王妃様までなっちまったのに、実家に追い返されるんだろうけど、頼りの実家は没落なんて。しかも、相当実家はヤバイらしいじゃないか」

「やばい？どんな風に？」

「使用人の連中も屋敷から逃げ出してるらしいよ。王様がかなり毛嫌いしているらしいからね。王妃様もその実家も。下手したら家自体潰れるんじゃないかね。騎士様もそれらしい事言っていたし。無いとは思うけど、ひょっとしたら王妃様もこっち側に来る事になるのかもねぇ」

あぁ、怖い怖い――――女は、その細い肩を震わせたが所詮形だけの同情だ。

没落した元貴族なんて出自の娼婦が決していない訳でもない。

元王妃など、亡国となった敗戦国から戦災奴隷に身を落とした者で娼婦になった者も実際いたのだ。

あまりにも珍しい事だろうが、その出自や肩書き、教養などで簡単に上客を掴まえる高級娼婦となれるだろう。

王族子女が奴隷の首輪を外されないまま、娼婦としては底辺も底辺、街の片隅に立ち春を鬻(ひさ)ぐ者――――売春婦になった例もある。

イザフは、妙に乾いた唇を舌で舐める。

いやに、心臓が早鐘を打っている気がする。

どうにも、興奮しているらしい。――――――そんな自分に更にイザフは興奮した。

（ああ、落ちるのか。堕ちて来るのか）

高級娼婦となれば、イザフの財布事情では手出し出来ない。
ならば、落として落として堕とし尽くせばいいのだ。

女から聞いた話に、さてどう脚色を加えてやろう――――――イザフは、思考を巡らせた。

噂話は、面白い程にあちこちから無数に生まれて、更にあちらこちらと飛び火し、元の話が可愛く思える程肥大するものだ。

廃位されるという正妃の、その実態を虚実で貶めれば何処まで堕ちて来るのだろうか。

「イザフ？」

訝し気に名前を呼ばれた。
女が、煙管を離してこちらに手を伸ばす。
それを拒まずに、イザフは頬を撫でられた。

「何だか面白そうな顔してるねぇ。そんなにあたしの話は面白かったのかい？」
「そうだな。かなり面白い話だ」

かつて、イザフが仕えた屋敷の庭先で立ち尽くしていた少女。

幾度かその姿を見掛け。
幾度か声を掛けた。

けれど、返って来たのは返って来たとも言えない《無》。
それにどれだけイザフの心は傷つけられただろう。
（大嫌いな、アリアお嬢様……）
かつて自分は、何を思って、何を考えて、どうして少女に近付いてしまったのか。
ただ解るのは、憎しみめいた気持ちが未だ胸の奥で燻っている事。
遠く手の届かないところにいた存在が、堕ちて来る。
そんな未来に、イザフは醜悪な笑みを浮かべずにはいられない。

お嬢様。
どうか、その身も心も穢れて下さい。

イザフは夢想する。
けれど、それは所詮夢のまま。
十数年前に、その華奢な後姿を見たのが最後。
そして、二度と死ぬまでやはりイザフはアリアに会う事はなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1978q/

貴方は私を支配する

2011年12月11日22時59分発行